我樂多誌

八

昭和十年第十二月上旋

特別
イ4
1919
471

176736

我が生涯の記 八

昭和十七年十二月上浣起筆

○本二皇子御降誕とて国慶の日なれど事ども来たれ
ハ二十五年前つゆ忘れぬ喀血を見たる。後世の困苦
辛と寝に就かず、一回切り咳も見ぬ出ず、熱もろくに
日と共に病も代りかたく、家人や医師が朗ハるから病床に
就て新美、北業と把う今日の一週を夢中に暮し
喀血ハ隠分神経を鋭くさせ、実ハ廿五六年前
ぬ、意外に閉じまるのハ酒も飲まず、神経も高ぶら
とびあるる。実と言ふと言ふハ少しく酒量が過きた

板倉星光　砧

小野竹喬　山並衣

38- 9257

此の度と思いたのかもしれんなあと。自分を養生をすすめるまあと
能さんなりにもなるべかりから、こんから喫煙も控へること
とおもてる。或医者い身分の心臓に負担のあるかも
とふて皆左注射をやったが、自分の頭部の容態ひもある
うの如く思ふてどりりしたが、私のかもとしてもって長生
のいい私の心臓さんあるの癖があるけれども。今初まったこと
でもないから、安心しなさい。と言ふた。どうも北寮
がかなり疲労と身体を冷打したらけであらう
かいマサカ臨時[illegible]ちゃいの。去年が京都から
見舞に来てくれた。心配されから大丈夫の神様を助かる
ようかと思へてくれたら、亦来年は[illegible]
人いろいろ我儘な人で今年迄へる度まることといせ

ぬ、こんどの病気は長くのうる迄ものとふたとおもさ一笑
をもらした。
後藤新平伯爵と[illegible]した北の一周のことを考へると
話を後藤さんを、うじうじ[illegible]
日々の二尺[illegible]
へうかのようつた。[illegible]
を字のもも来た。ある立面かし抽象としても
あたきの鑑賞を[illegible]
まで来終を海岸しかが賀四郎流い[illegible]相撲から来
たいろ[illegible]を無うた。村山から山陽の
待合の鍵屋を[illegible]
土[illegible]
ぬ、[illegible]村隆から三[illegible]

文墨は浜隠者早稲田の印税の四倍ほど五十円迄つて来た。
近日集成的次編年史の第七巻が出来した。北海道
報ずる所四万円迄用の過業早稲田の話が掛けもあり、人
吉都座望まれ余の擬燈漫録一冊が出版の事
う無邪と成る材料とそうした。冬村から音信もあつたが先
に出来した小説指表の責見あるが東都へ行つてから
謝状と寄せて来たのを見ること、四月書時が見えも様
又の出版を薬を徳へて長るやうな思いした。我人と世世
の書ひとつ有るい本年五十二月で世蓋ひあるとも
るどしの嘆せず今のまゝ過ぎつゝある。七人の年時自分の如
めて見る所である。
病床の静閑を祝するとかく実に幾多の人に無聊

を書くことが出来ない。北の一通りは知る者があつた。此
家と互に此隣家との往来の煩に入りいこと絶度と雖し
ばしばこんな手紙を修地を如何して今まで出来ないらな
い。十二月まで程の今が有る、さて酒を飲まぬとなると此
今の臨まれない。ほとを制ういい日一二を除いて皆酒い
る方針とするつもりである、実に前自分は十二月中は身体を
障が起るかもしれぬ。実の誰も是を
警戒と雷する時此自分のやうな人に引しての
である。
○日本のうく書ふんだ面白の面白の所を流しを
の面(後)白い所を抜をとしこゝは様に入れた共の痕と見る
こゝ、なるまでにうで連続的である此點とうこと

西洋のアルファベウト綴りの文字と大いに趣を異にする。
日本まゝ漢字がまゝ用ゐられ、まゝ仮名を交ぜ用ひることゝ
いふ事に限るやうなる位漢字が支用されるのみ、其
とまた仮名を多用まゝと所謂が異つてまゝ仮名ばか
りの文章のかきと漢字ばかりの文とを見くらべると、
双方全く別種の國の文字の如くなるのみも不思議
ハなれど、実の漢字と仮名ハ全く根本に異へたるものあ
る、漢字ハ一字つゝ單獨的で見るぶーも各字連續するを
要しるのに、まゝ仮名ハ共同的とでもいうべきものか各字集
合連續をなすことのである。書藝の方から云ふと、仮名ばか
りきいて漢字をきらひみる時代もあるし。漢字をいくら
か交へて仮名をきいた時代もあるし、漢字を主体として

助字として仮名を用ひた時もあつた。漢字と交へて仮名
をまぜ用ひるやうに書くのも書の藝術であるが、仮
名ばかりで書く流儀に流れたるよりも書くのも一種の藝
術で、其しの人の地の為めに為る者と見なし後世及ぶよりて
成る。西行・定家・仮名書の名人を指し後世及ぶよりて
とするのハ、仮名文字の組合せの変化があつて、其の自由
な配使する連續文字の後に文の可らさる味を出すから
らである。実に漢字の動的で仮名の漢字の目の鈍重と較べると軽軟の快
あり、連續の線が漢字の静的で文字の如く動的で
活で、そこに研鑽の美を生ずる。仮名の漢字のごとく
複雑の業畫いろいろ複雑味
を生ずる。墨絵のように文字の配列ようと複雑味
紙面の文字の陪の美をなす

いま、乃ち墨継が墨の清淑美を生ずる徒と俗名に一つく離し
したい格お既もろの等閑ぜうのことであるかいうんを連続
的な維持れ業を達せうとすると、そこに絶新い花葉の生系を
生ずるの力全く業力のもののようなるれ書義の玄義なる
書いこいう所、主義之うどの美体のぬい天下獨歩ときん
もあるが、日本の上代民族の名人の業詩と殺て義之と
張らうものの、文字の性格をすることを異国あん書義のの
極致を達する心義一つくさるを得ないてけである。上代の古
墨跡をみて感ずる所ともあるう

字を大きく出すか小さく出すか、もくしくは短かく出す
業績を立てるか立てないか科めようか、業を強めるか弱め
ようか、変化い業端から逆つてものを見て生まれるのである

○都今を去ること四百年前のことである。書道の大家
何紹基と時々相対して、分徐者今代の書家を論ず
流上刺激が多いかくて、書道を研究するものの
書国の一つである。何さん人の北の湖光と相着しておも
しろい歴吟を捨て、北、北、北、北の「轉ま石の苦を生じるの」
とうのである。

○長谷川泰とうふこのが殺人の始祖で一度死刑の宣告
まで受けた十年、牢獄に繋がれ北北無罪となるにいい
種法学上珍しい事例であるとまで、亦性慾問
題の稀れうる一例である。北一件の北北の強姦の事
しく書かれてある外全くふ法のあることふ河野さんふ
と北人の長母の性慾の犠牲となったのである。叔父さん人

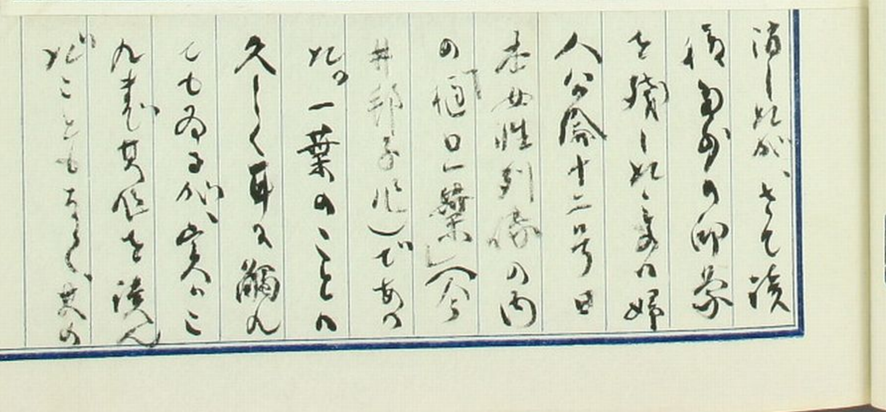
が放埒であるので女房の信用と夫婦愛を失い、其の妻の良人
を自身に飲ませるのでいつ毒を盛られる恐怖に移り、果は
閨房を異にすることもまたもうも良人は女房の手をかいつぐ
死人だ。そんな女房が法度に成谷川の所為だと云ふから一旦
は死罪ともなれば救はれたが、実は谷川を妬く訴へたのは
叔母なる其人が飽まで通れば姪を獨占にして狂犬一家
の為めだと云ふ所から犯つた[illegible]欺騙であるのだ、其の苦
のことが断れて[illegible]なるのだ。
とうとう、妻が良人に勧める復讐の念の強いことと、妻
が一旦[illegible]する男をどこまでも獨占にしようとする強烈さは
[illegible]幸の為ものの美人と犠牲に供せんとするまでの比の
は全く珍らしい実例である。（十二月弥帰人公論より）

（来る十日の紀元節に死刑を宣告されたる人の恩赦を願ふ
まで（以下一行目に死刑の事を書かんとせしも）

○昨四日を天二皇子御命名式南門を出でて御浴湯
式が行はれ、引続き御式と後宴と唱歌を奉仕せしめ
リ三上参次博士の後宴を奉仕したのち、御儀式の次第
を放送したるもの、御沐湯式は朝廷の古くから行
はれたる式で佛教の盛んな時代まで佛像に加持祈
禱をした又市郭を心のまま浴湯の上に四映し妖魔を
掃ふやうなこともあつたが、時代変遷して折衷された
のが此儀式となつた。後書に「入浴の時沐浴」とある侍立
は三人で後宴とまうすは内閣の諸公は二
部である。何を後宴あるかと云ふに史記を読ん

者紀を撰んだりしかが、即位式後の北の儀式をも日本書紀のあるこをを撰ぶことをすつて、その撰ちぐき面を基調として定めたものである。神武天皇御東征の時金鵄が弦ゆく賊徒が敗亡の一部を三度撃ち人心不思議なことを十二月四日の即ち北日が祝式の日金鵄が賊を撃ち南の方向をさすことである。三上のいふ通り自分は或る北の儀式に奉仕するの光栄を得て居るが、昔の伶人の家系のお家式に共通ある点者が、自分は之を同じ役をつとめたものと思ふを踏み感慨が深いと言はれが、今さまたもあらう。

の自分の四五の為に所しん矢鱈に旅法を翻訳しても無駄を



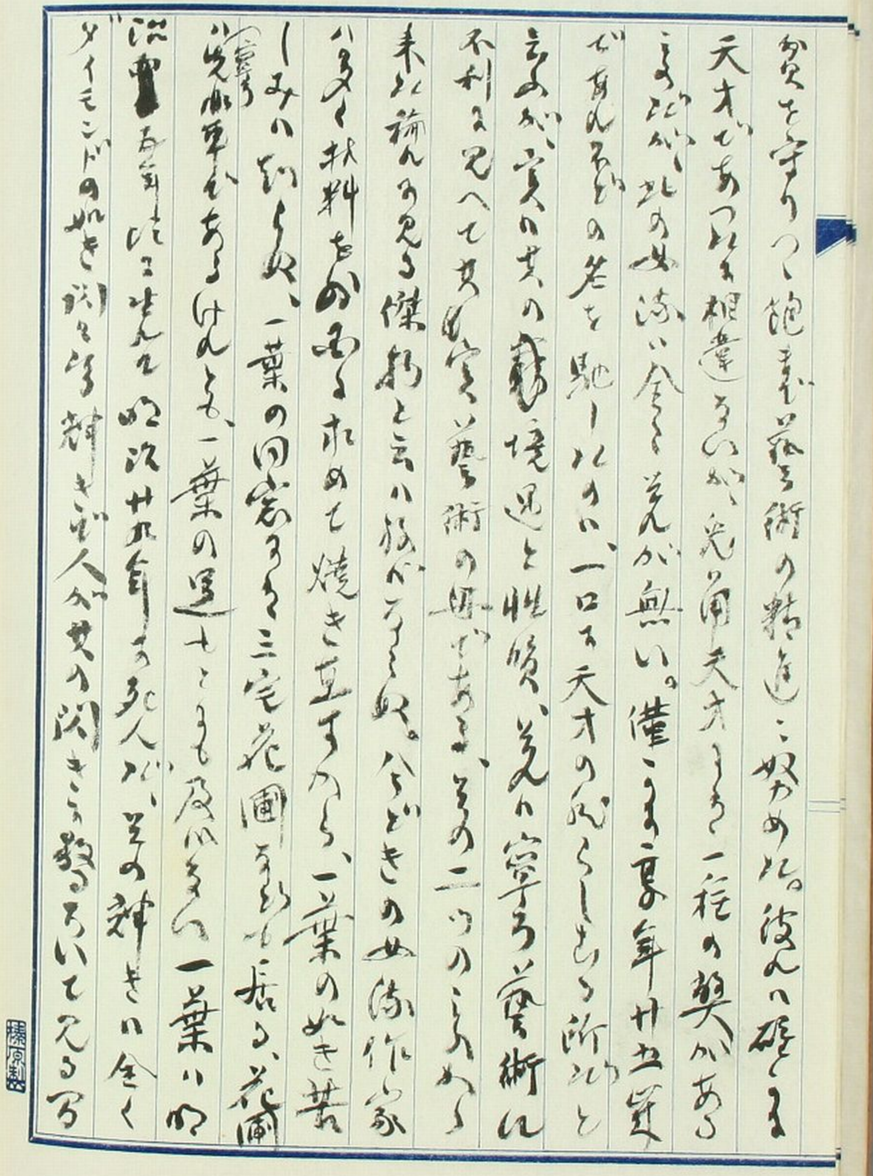
清はれが、さて後後者の印象を撰しれまの婦人分論十二月日赤女性列傳の内の個口一葉」(今井邦子氏)であの一葉のことの久しく耳を鍋んでもあるが、実がこんまむ方位を後んがことをもちろん其の

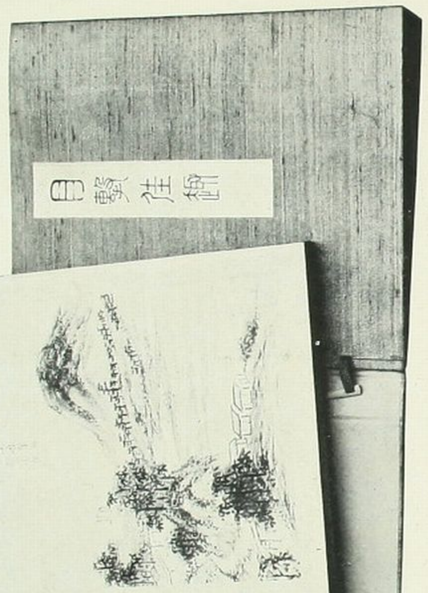
経歴を委しく知つて居らぬが、今富山侯で北女流の行住の大略を知ると、彼くまぬ以来の低家として稀有の人である。一時小説界の大家直(?)が激賞したのも無理はないが、自分などの眼光は北女流の境遇と性格を達きと推かんとする、北女の師匠不幸の人であり、鶴田と妹の生活の為め親の為めにする不幸の境遇を在つて、中島歌子の門に立つたが、生計の為め永く教を受けることも出来ず、一時は生計の為め駄菓子を拵へて行商まもやつた。されども流石に高尚なる志を立て、窮苦の間を凌つつのみならず、流石に書いたが、そもそも原稿料を手に入れる深んでもう一時は今までの生活をつけるとして、小説の筆を絶つた。北女の小説の内は井桁水で

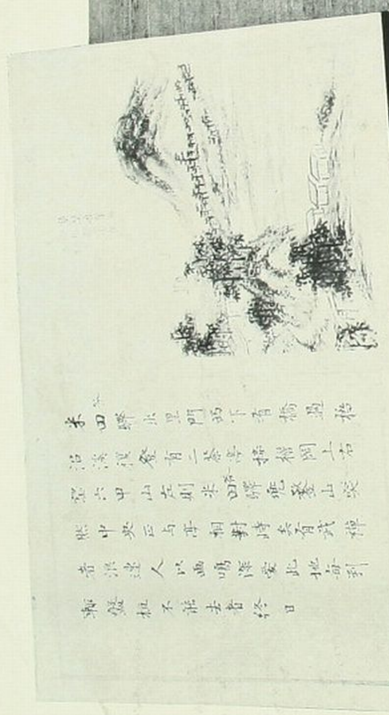
閉市の間を走廻つたりしたが、えん家関係を絶ばそうつへ、富田屋時代お婆を張えんとして感変ト右と相談すると、変ト者は其の無禄を嫌め若こう変と何と変えこ(?)でもどこかに深宇犯すべきこと所があつたとしい。彼女の義術の北の手元用能を時を発達したので、後女が後藤男界を駆かしたとの心ハ日今こと実者附ら駄菓子屋を深附迄ある子供うるく掃しいその牧を実行したこれの後人の変名の北時から周囲廃し、雑俗社をあの前金で其の原稿を托(?)ら)と思つたが、彼女いろ〳〵守る所が他国で元来ハ一時のうと遠記して 藤原 法号業者の口車にも乗らず

盆踊畫賛　紙本竪幅

野馬　紙本竪幅







桃下騎馬　絹本竪幅

第二回頒布品　童謡

第一回頒布品　三羽双

○蘇長公の堂心の集を十六を数へ此が同者の
就て十六快事を数へたるどんなことかと漫て
書きつけて見た。同者の時も略る時
であるが、松花と酒菊と書物と花と家
とかるべきもの、亦同者新生活とうると花と家
生活とおのづから異る所もあるが大体書物を始
ふと何を快とするかを書きつけて見ると大要左の如
くである。

一古版本、○齋鈔本、○墨(古墨の)匂ひ

恐らく此匂が音刻家が刀を着て感ずる匂ひと一
般鑑人の肺腑の染まるまでこそであらう

二今心の書を得る時

(一)人から美本を頂く時
(二)人と校合して善本を取出て比べる
(三)禁版絶版の得難い本を得た時
(四)数本の内九も家花本が最善本なることを知る時
三 (五)校訂校正の成り行く時
四 (六)書物の修補の成り行く時

○流本を完本とする時
(三)美丁と錯簡を訂正し行く時
(三)快や箱の出来た時
五 長く会かけた写本の成り行く時
(一)目録編成の成り行く時七九数と長
(二)図書新著の稿成し行く時七九
六 (上)図書(上)書に標題や口書をかき花記を押す時

七 不明の事の分明を得た時
不明の著者、不明の写手、不明の花記、不明
の年代の知れぬ時
八 得去の集書を展覧する時
数に於て質に於て人に誇うべきもの
九 絶筆本の発見せられた時
得がたしと称する本を得た時
十 寛書番号の或る数に達した時
十一 四巻本の手入りする時
金沢文庫も四巻本の所在を問へつゝある
北条氏に属す
じが家に伝のある図書は凡全の花本である

十二 多くの図書類を見聞を得た時
図書館に於ても最も喜ぶべき事に属す
十三 図書貸出に巻の欠損を生じず且つ貸出数の
激増の事
これの事から図書館に就て云ふ
十四 目録の完成、書架の増設、カード式の改善
これも図書館に就て云ふ
十五 出版計画の成功
十六 名家の記念寄贈
著名の花業家公孫後花者を奉ずる図書
館に寄贈の例を云ふ

○手柳宇佐郡の人の学者山口坎山の事跡に略す
分つて長人と、高麗くして、学問の富深山瞭流と
取捨を託し所たのみし四巻を得た
（前号）天神所山口吉之と申すが今を坎山先生宅
家と称す、唯今の享主の永原駅日雇指
なて明治元年九月生んで六十八才、其老母が
言名を寄学者の長めるを由日住職する者
学慈を行は明治十九年一月歿五十八才とあ
り、何校凡学の戒名を忘れ仕し八情高題
歳の嘉永三年二月とあるも紀年と年次符
合とさるが如し、戊辰の兵燹に隣家も焼失
して一切も残さず鳥有の悔し、其後筆跡の也

複原製

凝に帳面行書と称第を家人なるも命校の大切
な書き物と称し来るも数年前清水流の際
風雨にさらされ書物なるも雨名焚失と
り師伝に一向名なし数年前墓文は恰士未法
なるも墓碑と清水隣屋村の善徳寺を教
ひやりし事あり
金三郎の如きは北家は元来近村須走村山口
木村と婿を貰ひ天神所
に分家でしてなる其子が即坎山先生先生の娘
が今も元無なる是も婿雨を先生家を在る
こと称して家（屋）敷中一切名失ひ、貢人と
なると十年間生涯、老母の幼年時代に祝儀
香典等の日用の事を育父の指図を受る習

得、門才衆が父の歌を掛け等、山口家に小四郎家
の出入うち　以上い志毋の誤作　まて此ものうい一切
右仰

○格言や金言、うんを洋語かき示漢字の書けば格言
のかれ見あんと、光のコシウエコシヨコシである大衆の為めこうする
格言や箴言、心学有い要易に歌と詠しなうえを歌と
云ふと詩と四洋の格言多るこまでるんが、久しく○野人セ
ん、哀味もえい和歌が却って感情へんしるのが、今いコシウエコシ
笑けて思く人を弱しと思ふうと努恵の力の強き
ありうち
おうちの手もつけうんめ安堂と思ふうと作る栗の
いからうる

かくまんがかくうるうことのと知りうるうる止むる止まん
の大和魂
事ない足うる位せるうる足らでるうる身
こをやすうけん。
為に成り為さ為へ成るる成る業を成るを云
へい我が為さあうる
恥を知ん恥を知らなへ恥をかく恥をかくきる
恥いあくにる
実がいると稲いうるのかく人い身が童をうるうるとい
りーあかるうる
おうもしいあるる人の限りの知んぬ為う
盗人

英女も後つ心を知れんや首尾のかちなる人の作ふを
又よ
涌ふかす大樹はいかゞ神ぞ多の後生とうう
胸のやすさよ
咲かさんば桜の人は折くさびを桜の花いてくく
うるけり
恨思のうる恨思い誰もするうるめ恨思するかな
君
人多き人のやうも人ぞうき人とうん人、人とうも
人
世の人々巷を捨うと勧めて捨ても捨ん寺の住
職

上えんば及ばのことの多かりき心正着せくうも已う
心は
下えんば我にまさうう者もうし心とうも乃よ天
の言まさを
我とうふさい心捨て石ら大千世界さいるこあ
う

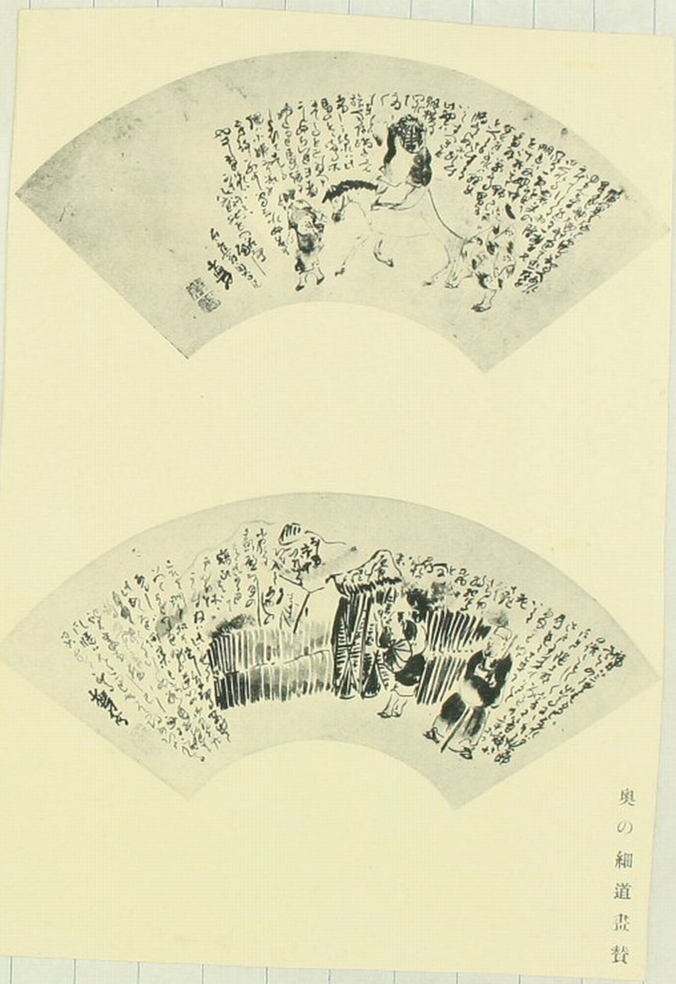
向て射ぬ奥山子いちの上手かな
怠らぬあゆみ悲しかはつふり方花
我うしを我つまつくや鳴る縄一巻
家庫の前し始めや役所　紀逸
俳の衣着んば浮世が惜くうう

松ふるに秋を垂るゝ稲穂かな
許るるも後ろいそぐや焼ごめ　同
浦めぐりの佛も人の寒ゆるかな
世の中よりてかい霧から先あつる
人をとる草はかりして美しき
去るて後ろ姿ぬ浦世や佛の雪　同
人里に粒んば曲る野菊哉　二茎
人間がるるば曲らば菊の花のよ
盗人をあくば深りはけるるから
ふるるどよき隠れ家はるし
風鈴の下に一文世をのがれ
ものとして戻れば庭に柳うゑ　蓼太

シミンを憂とせるを公賢を討ぬべき時が来れば、皇今の出嗟
と最上乗の道歌や元るのひとしき俳句を愛する列参
することは公家らいけのとも、元すぐこゝを有会のよ
を強制する、えを漢詩や羅国に詩しいのを示したと
為人の誰の為会の主張と同ずるとう、　十二月九日
心の者の道那くもと大衆を教化する目的で詩人れる
ばかり自分の為を主とする俗衆、卑俗の俳諧を
ものも、みやびを主とする和歌為治の元を嘘童
して敵とす、上面のくるくるえんの様ふがあり折角
表味深き箴言も泥土を垂れるのは惜しいこと
である。左のかきり拙あて卑俗の中と思ひを第一
とする。

氣もつかれ目もくるめくといふ樣なるいつの間にかとけり
消るたもとをうらみけり
三百餘年餘をへてやうやくとけしと思ふまくらかな
うらめしや世の中
骨かくすうすぎぬ美人といふも皮の
うすぎぬ
義は奏よ悪しき奏なる銘を世の人の心に白花
かぎろう
一代の守本尊なつめんが我の人とも仰とけ
ども、
仰ぐ方寂骨をもつて心を雅致とし大家を起爾を保す
るの形くもつかるる而して此の歌をいかんも

[illegible]理と雲すと、結局[illegible]雅の詞を基として[illegible]空隙なる
と同のうるはるるものの
日本の語の數多を終えて珠を[illegible]べきこのハガくきい、えんば
偽強であるからと言ふて新人ぜらんを為るとハ注意すべきな
軽かる石を苔生くす
おそつく類の鉢を[illegible]
景本の下ろい星をぬげ
稼ぐに追つく貪之ふ
金の為る所に蜂ぶ



奥の細道畫賛

の流鶴基もといよりの者が醜婦を妻に娶つたが容貌を
醜ひ恥の錦織で良人が歎服するあると良妻賢母
であつたと云ふんを聞き、此の婦人はいつも袂を白と赤の手
縫と濃りて縫ひ、或る時美が良人の寓目する所となる
つて、何人の為めにそんなものを常に袂を縫ふんもあるかと
問ふと、妻のこたへを見今のことを不来るあの白日と氣を
つけてゐてもやり損ふことがあり、思慮をられしてゐるべき
ことをちやとめることがあり、長袖を思ふことが多くして白
から淵を思ふことがあり、此の鞠の即ち其の花錦
をもつてゐるべきものが、やり損つたと思ふ時、赤鞠を
をもつて、淵を風まる時は白鞠を芝いて自ら誡めとし
てゐる、直ぐにやうとやり損ふが少うて、まつれのひ白鞠

を基とするが多く、赤鞠と較べてやはり大きくなるとのこと
なれど、これは珍らしい自制自修法の思いつきで、教科書及び
其書きなくてもよい様にとあるが、特書婦人の何人と雖も
べとえれいと思ふものあるが出来ない自ら酬と称して特書
の盛衰を吹き、自ら衰えんと欲し、男児の嗣業を惜し
なば、却つて子孫が保たるべき特書の到る所となる。結婚する
とはなるべきなり

○今は カヒーハウスが術科到る處あるが、元治元年
初出来たのは文政二十年頃であつたか、文政廿一年
四月十五日の郵便報知新聞に掲ると下谷黒門
町二番地数寄屋の隣の新設さんたんと可否茶
館とあり、まだ西洋の珈琲店と似たり寄ったり入る

カヒーを吸うとうとうと、互いの顔笑が出来、且つ新学
や 戦異小説などを持ち寄ることもあるので、乗る時分を長くする
とかも未だ乗ることに慣れない青いてあるから恐々こんなものが
カヒーハウスの始めで、カヒーを飲むと珈琲
琲の字がある。可否の二字
を当つて書く働きを見る。三三五五の人相会して休
憩しうるとて互いに談話のことを述べ
いろうするのが、北の彼の面目でソラップ位い趣の
ことはカヒーハウス本日来の面目で今のやうな女
給仕戦れる所でなきうち、
無論如何賓客に接つてある
中時東南北
漢字使用の当時の名としては上等

のようである。

○狂詩の天才上方は銅脈である。江戸は蜀山である。自分の銅脈の狂詩を作らうとすると、其の軽妙の洒落、どうしてこんなに江戸臭くなるのだらうと思ふ程江戸氣質である。銅脈の狂詩で自分のおきなのいて鈴庵多雲助、山中貯夷催、翰素富焚火、散成胡麻呼、の詩で雲助の生活と四無形を描写をコンナに甘く歌つたものは無い。此人の聖護院寺の法大夫で白中類と云ふ人が、飲む狂歌がうまく、銅脈を初め面白い名で本名よりの方が有名である。銅脈の戯名も滑稽味があるらしくつて甘い酒を飲む詩人のようである。銅脈と云ふ所から、狂詩の詩を作る

も滑稽味がある、銅脈の廣物であると洒落れた言葉が滑稽である。銅脈能を云く、金剛能雅合、道能銅脈不銅脈と、近来表化思想を赤蓮に壁に、外皮心無し紅色もあり、外皮紅色もあり、心の白きもの、赤化者の中に冊心を鉄くまやかしこのうち、

上い点を紅くして紅色の心に達せず、新聞

○又さよ、を糟鼠とした俳書があり、「みさよ」を屋鄙とする點があり、口中に一種の料理が出来て、馬いさんと蛙型の蔵を貯く他の合料に供するのが、狂詩の人間いさんとなつて私

かれ[illegible]品を偷んで食ふとあがいとんの味が知らるが、可なりおいしいものと腐敗しやすいとあるとある。鮓屋がみさよ」を名とする[illegible]物の極致」とするは、風刺の意味があるとおもしろい。[illegible]物の「みさよ」の他つれあるとソット偷んで[illegible]やうなものが多いからだ。

の「あべ」とは蔓菁は恒根の極くると別もなく繁茂したものとあるが、自分の庭[illegible]日蔭であるからなる。[illegible]唯に淡会の別荘[illegible]宵も実を流人がことがあるい。

[illegible]の柵を[illegible]くつて、[illegible]を造いして日陰をしてみる。[illegible]

蔓菁[illegible]実を流[illegible]ぶが実[illegible]朝の郭を田別荘を行くことも[illegible]毎関心で[illegible]別荘の浴室番が竹籠を[illegible]

つて日陰棚のもとへ持ち来つた。縁りの高の中の武野の赤い果物が[illegible]又一つのもの[illegible]可なりさるよい[illegible]で、自分の妻人でこれを床の間に置いた。北の八国下が庭[illegible]の手入れを素人でやるとあるから見てゐるこんの日出[illegible]いとあるとあるが、即ち一枝に七枚の葉の着いてゐるのもあるが、三枚着いてゐるのもあるが、七五三を祝ふことを知つた[illegible]の人が持つて来た譜[illegible]

○昔しの文人墨客は使用後の筆を埋めて墓標とした。筆を粗略にしてはいけない文人の心根が窺はれるものだと思へば美[illegible]が実に己が宣伝の用に供したものだ。市河米庵[illegible]

どい多くの名筆を為めて百筆後を心のままに退筆
の仕末の意匠を凝らしたる或百の大小の筆の竹管を円形の
組人びとんで火鉢を作り四常の座敷の置いたとき
が、まこと風流、或百の筆の筆先が行列して、筆の刷毛
を敷銀[redacted]を見て楽しむ一興である。時つたとする時しい
を大寄せと云はれたとする。自分の退筆で棚間の[redacted]を焼
飾したいと思つて切角[redacted]ものである。

○「書道一夕話」を改刻して文人墨客と楷書を
改めたが今印刷中で年内出版をもつてあらう
従て例と左の小序を作つた。

自分の往年に於て多くの文人墨客の傳記を渉
獵した。其時感じたことは、傳記の乏しい文人

が尤も一番の文人たるべき、一行の傳もない人
多かつて立派な文人のあることを知つた。先角
文人を傳する人は徒らに歴史の乏しかんん
ことを欲した。却つて眼目を失つてゐるものが多
い。実に欲しく乏しく傳するの要い動もすると
文人と平凡化して仕舞ふ。宜しく多く有限な
活れた文人の真骨頂を目撃することが
真を写すの法である。自分は其流儀で
勝手な取捨をして百般の文人を選つた。
かれ方である。北の紙上の人物の内ゆゑ
曲つた者、矯の人も多いが、美い自分の傳御で
珠を採つたるべく、文の人墨客と云ふ人の面目

かゝる本来斯(そうしと)いふのであつて、其の音籟な所が彼等の彼等たる所があり、亦彼等が愛嬌あるとも世の歓迎を受けるのも此点であるのだ。

○誰んやらの元旦の句に「元日や一系の天子不二の山」といふがある、これは世界に誇る日本二大名物を詠んだのであるが、萬古一系の皇室と崇高を競ふ人とするは富士の山だ、その大空に聳えて居るさまは何人と云ふまい高きものであるが、日本の詩人は古来之れを形容して孤峯の山容といひ、倒さに懸る白扇だとか、飛山であるとか、どうも形容が拙劣である。之に反して西洋の詩人は流石形容が巧妙で適切で且つ

此重の聖な暗喩をなす、佛蘭西のホーール、リシヤルは善く世界を正義の国を覚め、遂に日出る国日本を正義の国を得たと喜こび富士を讃して其形は宛から合掌して天を拝する姿があると云ふたが、これは日本人が思ひつかない比喩であるが、此哲人が物く世界に比の会堂が日本の七ツの名を比し、皇室と共に富山嶽の山高く美を一層高くする

○幕末から明治のめけて人形浮び名人と呼ばれたのは松本喜三郎で明治二十年頃まで生存して居た此人は当時の初めに本に生れて江戸へ上る途中

大ふ[illegible]三立のり[illegible]大寺の南大門の二王の像を見れひとく感嘆し、どうもそこを去ることが出来ず三日ばかり茶屋を敷て彫の者[illegible]ルと[illegible]ばかくうんでゐる。長こしらい江戸へ来て浅草の奥山へ観音を拝みて此為も又七比が其の人形を生[illegible]けるのかく生来真に面(面)つて彫刻とそう長三寸の低いどこからどこの名聲い彼り上つた。長三寸の低いどこからどこの宮殿が、その全身に生命の脈がおつてゐれ現代や眉の毛などハ其の人形の年齢のふさいし活人形のもを求めの羽二重のキしへ一本つゝ植へて是を人形ではりつけた。なる面倒なるの皮膚の色に[illegible]がえんそう絵様芸術して胡粉を塗りて下塗する

胡粉を塗ると色こそ艶を消まく特得の工風が出つて、今い各デパートを盛んに人形が並のん人形が出来るやうなるのだが、どうも皮膚の色が艶々しくて、実を遠かることが為しく長こしらうも出来ない。

○貝合の会天心(覚三)と一ト三四の変りもの、その輪廓もとりてゐるが、昨年市兵衛が著した「貝合会天心」の傳を二日後思して初めて天心の詳を知つた。

天心は弱年ゴロ本書と異る時湖と号んだが、その晩年のことゆえ、後人の書いて[illegible]ぶ時湖風とある。彼の祖前の生涯は一時横浜で貿易に[illegible]

流石に[illegible]あつた。天心の[illegible]滝一郎とゝあがあつて、由三郎の弟に当る天心の愛弟子[illegible]初角[illegible]とゝ比、

覚三が東京大学に入つた比の学校の模様は、余の通俗懐旧が引用されてゐる。エドワード、モールスが フェノロサと紹介して来朝、東大学に教鞭を取られた。天心の将来を進るに大切の現像であつたのだ。後年に自分と日露の前夜に フェノロサの通訳をした多くの新旅行者であつたが、天心は一段と上であつたから、最初の日本人天心がフェノロサを斡旋したる相違である。覚が晩年疎遠し[illegible]

[illegible]し フェノロサが頻繁を紹介した由つのである。到て天心がボストン博物館の美術部の顧問となる迄入

フェノロサは日本に来た時は廿六歳で、ハーバード大学を卒業生だがスペインからの移住者で、其父は優れたピアニストで、フェノロサが美術の天分のあつたことは[illegible]未だ知らず彼は今迄日本美術を学むつゝ日本美術の廃滅を急速と謂はしたが、其の結果は実に驚目すべきものあつた。

北斎やつと美術と云ふ二字が正風と文比位で、古美術の[illegible]を[illegible]が漸々と企てられ九鬼隆一が上官で、天心は覚三位つてあるから[illegible]出[illegible]した美術いまゝ霧の内に銷[illegible]さんもあれが、明治十五年比絵画共進会があつた時狩本雅邦が賞を得たが、雅邦と橋心は[illegible]ある特別出品者に無賞であつた比、とゝあのい出品の

彩が時流と共に離れてゆくのである。美を記録しようとするフェノロサが天心を伴なって芸庁を訪れたことが書かれてあるが、芸庁の役人たちは、西洋人が来たのを見れば出先庁、洋人の真手帖兎と離れけれども天心が絵を描いて逃げ振手をしめしたとあるのは此時のことである。

天心の初めての洋行は明治十九年で濱尾文部大臣がドイツに行く時、此行天心はフェノロサと同行し、天心が初めて欧米の美術を観、いつも天心と美術上の意見が相異なるのを感じ、天心はこんなことを考えて洋美術を探討を志したのであった。此時九鬼は特

命全権公使として渡欧するから、天心の帰朝に託して母堂を船でしめられたのが、あるいは天心を為すべき、夫人は九鬼と離別してまもなく天心を為すべき意思を表示したのである。

東京美術学校の校長の新納濱尾氏が、フェノロサが二十三年日本を去られた六月、天心の濱尾の後を受けて校長心得を命ぜられ、又前の年帝国博物館館長を仰付けられた。天心の美術学校の制度を自分の主張し終始美を用い、西洋の模倣を排斥し、美を用いた。美を良相めいた蹴鞠の起を形づくるものであ

つれて、書物を重ねるなどい学校を新たにすることい天心ニロ説かれて
ようく流しが、北の制服を着けることの問題ハと説いて
ある。

明治廿六年ノ天心ハ支那清国の様子を得れ、帝室博物
館の用務を帯び支那美術調査の旅ニ出ることい、彼の
性情ニ適する仕合せの旅であつた。支那古美術ニ関
をさらに大ならず得る所あつたのハ、彼ハ日の雅号
を与ヘ、彼ハ北京博覧会ハ、日本美術ハ決して支那ノ
踏襲でなく日本美術ハ必ず独立得らるべきことの
信念を得たことであつた。
天心ハ支那から帰てから、天心ハ文部省ニ協議の上、東
京ニ分校を設けんとし東京の有力者

総理ハ、そんハ理を達したが文部省ハ今まだ分らない
ことであるので天心と文部省の間ニ乖離を生じた。
四年で十年後業の洋画家黒田清輝と久米桂一
郎が帰朝したので、えんを幸ひ、ここ西洋画科
を創設した。実ハ天心と山田正太郎の洋画家ハ不
満ながら中から出た。洋画科を置いたの
も黒田等が帰つて来たからえんを頼(ハ)の天心の
本心ハ洋画を学ぶことを欲しないと云ふ
ものあるが、明治ハ心家の集まる所ものとなつて
校も拡張運動が起り天心もとうとう辞職する
ものとした。
辞職の後天心の計画したのハ日本美術院で日志を

紳会して官吏と對抗して民間美術の興起を計りし院長の橋本雅邦であつた外実業の後援者の岡倉天心であつた、氏の渡米は（遂に）（遂に）の渡米（遂）と踏り、天心は其誌を踏晦し、遂に印度の視察と上つて呉れた次三十四年十一月で、内務省から調査の命を受けたのと天心はこんを伝つて教へた彼の美術研究を御慶すると共に印度を通ることが出来ると云ふ次第であつた。

此行天心はメゴーンに今し程又の交渉を生じたのは勿論である。

天心の内閣は動もすれば美術とどちらびるくらいの勢力を出すほど此行大観と春草を伴ひ、天心のボストンで岡倉覚三氏の高弟の大観山は美術学校を辞して英国に留学を命ぜられ、行の者又日本版で正

来利加を漫歩したボストンで在の学者大観と春草が迫と生活費を合弁し、押意を受つて高弟の大観入がなつたと云ふのである、ゲードナー夫人と云ふ大金持ち未亡人びとえと天心等の高く評価した浮る所が有つた、此夫人は美術の後援者であつた。

天心の留守で美術院の経営に天心は正論で厳去で若手の芸人たちをこと任せた大観等（を）木村（武山）木村こうど もをこと相談し義手術村が出来た此時、此時に貴と提携なる ことを約束した、天心はボストンへ行く前ボストンで出会ったことがあつて彼んの二ユーヨーク、タイムス」のうつ がデオ、（ルこの内行と對し年護書を渡した（ルこは 日本で婦人を毒とする者、西部印度諸島時代と後略し、英

時の子も妻も我が子から道徳上重大な罪を犯したと云
ふ理由に対して、あくまで人妻を犯し
たと言ひがかりを附し、遂に得無つたのであらう
天心が外遊の代表本雅邦が肩を寄つて三十九年の
天心も出発を躊躇したが結局小説を得れば発表したが
雅邦は其後易者に占はせえんが天心を大変悪者であると
なる雅邦をいろ〳〵言ふ雅の変事があるとのことが肩中
一の在活が傷つけた雅邦の夫唱を聴くことが大変悲
なるも病弱の慰めを求めるに杵屋島中（まさ代
八栄菊の娘）を妾に迎へ、雅邦の妻宗子
の都合をもつて、家を別にし、雅邦の妻として三十円
を毎月送り、この都合をつけて雅邦が天下の美術家

を病弱と根さ寝かく敬くことの礼を尽すも尽しも
人生義渋の貴さを思ひすと考へたのが雅邦の偉い意味と天心賛嘆と
感じたと言ふ。
天心が雅邦を失つた後勝のあの男侍を一を加へれの
八美田春岸を失つたことである。天心は深く悲しみを
を焼いたのを義くて死人になりの悲しいことであつた。天心を
晩年五浦に籠つて釣竿を持ちて、釣をする日は深く悲
しい病疾の時疾の為め四十二才で没した。彼の死
後ボストンに赴ること十年の後、西洋の美術の当主も少なきを
美術も雅邦に、美文の当主も少なきを。彼の
死を悼む、死文ゲロ、ボストン美術館の東洋

新たにレコン、エラートン、ロッジが連名で天心のボストンに於ける功績を称した次の詩句がある

Oh, Earth and itself dream shall part
Never the dream shall part
とうたわれ

二者いづれ劣三の若き者なるべしとのことである

○各家の署名を集めるのを無味とする人のところもあるが、大きなスケールで世界を股にかけ或は年もとれのみならず大金を費したものらしい決して
なまくらでない、北京の（五十二）●東京新聞の伝ふる署名は number
いとちがひ流れは大日のスケールである、えらい事は

誇の為めに刻苦して蒐めたものなのに名士の署名三
蒐集となり、帝国大学総長七大臣署名さるもの長の校
長がやはり署名を拒絶したるもの校長
出来ないとあるものがあり、その為めの無駄、多くの有志
位ひの日を費す也、人数の経歴を後人に残すも
余無味なるいとは誇りの切抜を此の冊子の終り
にかめて置く

○大本教の行詩が拝奉する山陰の特産や京都府
の篤農家に於ける著名の富豪の次の清えはやうのもの
事実はまことにまことに北京新聞の陰と不国体
を幾視し皇室を石敬する義を持つまじきものとの
ものなるべし、まことの巧みを本書日蔵あるべし、敬愛の書い

其心の復活が証拠かの如くに思はる、この事
今の始めて のごとく 前年も同じ時期に拝答
きんぢ 其時の今上陛下 特教と題つれの
真相かいえんす 今日と思へば 自分は全体コレ式
のごとく大の姑ひ 往年山陰道を初めて旅りしに時
彼都を過きし 大本教の大厳主を望んに時
同行の人 美雪先生と 廣井紅秋が話をそれいと云
ふかと 自分の共感 注も自分は中間外れとなりて茶
屋を待つことがある、自分は美雪と大本教とのまた
のい他なる宗教と思いこうとしから此。美雪先生の
汽船の待 自分は旅大の使徒を作つたが 自分は
まんこの事を物がたり、却て使命と使徒の沿革を語る

北部の蒙古人 支那から移民が来て住した所である彼
都と云ふのは彼等が蔵教と称した地方である地名は
うの日本と祖先を今と異なる 回教も風俗も同じ
くする支那民族移住の地 日本の皇室を無視
する宗教の起るのも偶然ではない 仏教
べと神教する人の帰依を得る手段があるから
北の教が漸やく弾圧 有千万人の信徒を生ず
ることもいつた日本の国体を滅すことも出来る
可き筈 実勢力の平 特門と日本 決すべきあ
らずと一行を警戒 然るに支那教主教を
紅を北の宗のい 蔓延 自分の出時 ちかが
えて帰り国 まず、美雪先生 自分は教人と絶交

の態をうたれるか、北の野蛮が其実態を暴露するの日も来ることであるまい。

○勇平は常に曰く酒も亦養術なりと、蓋し勇平の養術らしいこと、何のあるとかいふて酒を飲むことを止めず、そんな酒である、酒のうまい所くらいこの世の中に無くなる、世の人々は酒を嫌ふ、云ふんあの人無人世界なりと云ふのである、酒は実に百薬の長なり、北越に美しい美人と酒を取るのは最早勇平のみ

○勇平今年三十数年前略立のうち十年酒を禁じ居ることとなり、即ち北十年間八年の不在の時とその七年間、三十数年前の色んな事を酒の為

まさる日とも無きん、居宅も先月中旬より二望を降記の日出発さき親戚朋友を挙くべき時に俄然略血を前年の事を追憶し、略血も記憶に新しく、何となく物味を感じ、酒と烟を絶対に止めるもの約三週間を経る、三年前の如く病体なるを感ずる禁酒禁烟のうるさきこと言語に絶す、実に人は日々歌す酒と烟と、しかして酒なくして何ぞ人生の楽しみとなるこの楽しみを捨て酒の楽きを感ずるを得さる也（十二月十五日）

○良寛は実徳長者はくらあと研究さん文子続も追こ関の さんと来かけ、いつもの謎であるうべく、伊南の日本時ひち

日、父の事跡が徒であるかも良寛も分つたやうで分らぬやうな所がある。良寛は伴狂ひはあるまいかと疑ふ。よくあるのは、父の徒からの迷ひから出て来たのである。注業の言ひ傷ひは、勤王の志厚く天真の秘とする事を著はしたが、幕府の怒る所となり世を作りんず、常都を出て分作や日志と往来したが、幕府の偵察が厳重で身のおき所なく、懐紙天真紙と抱き桂川に入水したと、第五伝せんとするのは、北説の如く、或は入水と云ふのは、南の北説の如く、或は餓死を送つたと云ふ説もあるが、なる程紙いきの高所入を信じて良寛は父と面したことがあるなどと云ふ事もあるが、「蘇迷盧」の歌は世を韜晦する為めの伴南の手段であつて、朝霧と一緒ひくし金鈴の花一の一句は伴南が

高野で良寛の書き出つたと推するものがある。良寛の出家は十八歳の時、伴南の三十九歳の時、伴南が京都に上つたのは五十六歳、四年の後六十歳で入水したとすると、伴南が此時良寛は三十九歳で備中国玉島寺の住職となつて良寛の出家に就て父の勤王思想と関係が無いやうに成るが、併し幕末の騒擾は云へ、橘家の人物の動静を異にして、良寛も亦幕末の出家の志を抱いたものとも知れぬ。良寛は十年の時、遊行燈と云ふ題で、出家とは、良寛を思ひ出すと云ふ。出家とは、何の事か、解しも良寛を無きものとの説と、南国遊譚も、うるさい世の決しても馬鹿にならぬ世間の人間でもあるけれども、良寛は、第一

代の行徳の様を知ることが出来ると共に出家者の日つ
々評の何う南時感する所が見られのみならず推測も的中する
為心地もする。良寛が初めて禅の教を学んだ頃
も何か人を誘う可き秘を胸に潜めてゐたらしくもある
即ち世の中をおもしろがらぬ人々が草のいほりに
一度かなとも思ひ口の歌を微すると二三何者かの心を誘
うて解良や定珠なども誘ひ入れうとの事もあつたらうと
思ふ。流れて良寛の師と仰ぐ僧侶を捜んで時々の人を
り其の詩歌に心の秘密をそのかすの様をさぐり
を解しやすく伝えその思想をそのかしてみるかも
取入る為無いでもない。何分南時八幡奉府の鑒査が厳
しく殊に以南の勤王を以て知られ、特家に政治と関係を

新し雑の里正がもちろん、幕府の目に特に北家の物とこ
とを思ふと良寛はうるさく飽まで輪廻の心をくるる
ようなことを想像に難くない。良寛の伴性説の起る
心根は此にあらん。良寛が孤立の歌形三巻を良
寛を世捨人と木村元右エ門が装飾すると雲崎代官
うるさを移奉出版まで出版したとの事。三の方木村を
通き歌形を検閲して物書を許したとの事。天保二
紙を著した以南の子に浅倉と出家なる人の和歌び
幕府を欺くまで言ひ長らぬうと取調べたらしく
もあるが、実に天保紙と云ふ
が北条所の和泉家と従兄弟
意を慕いたと木村家の国化と云ふ人に宛てゐる。

和歌家に金子義の実家で、日、久米郡の和歌をまとめたものがある、正一郎金子義の父は勤王家であつた。由之の和歌家と往来したのは事実で、自分はこれを作れば和歌の道を多く思つたのであらう、勤王思想の投合もあつたのであらうか、外那珠を役人等から見られる一種の嫌疑もあつたらしく思はれる、良寛は墨染の衣を纏はうとも、死後でもなほまだ俗界からぬけきらぬ和歌が多い

昭和十年十二月十七日

○夏合の印図と山形紋といふものは、似寄つたのが多い。おかし山形の方言の面で、男女ともに似合ハぬ味のある言葉があるものもあり、八月一二をきつけ、

カイダウニツケ　御馳走清酒　酒すまうの為めの清酒を言ふ、名きの為めで草鞋をはきなつら湯漬をかきこむ　ひやうたとの壁

キウ子ノカハラバシリ　狐の河原走り　為ちつきの無いことを、深く考くすまそいくと名づけ、まるで狐の川原走をするやうだ。

えんの木根みをしてどうする」と言ふ

六つ桶まれ七つ馬鹿　子供のにくまれ盛りを言ふ

つゝ後、妻か御ぢいて七つ目ハツは惜まれ盛りと言ふたもの、

二サく桃の木桃ちうたんせべ　紙張りも回し

ことを言ふ木に登つた子供を、下から

木を搖ぶりて真似をして歩くこと
（ものまね）（道）ぢうの意

ハナノシタメゾウリミチ　鼻の下の伝道

手あうるをうあ、ゾウリミチは雪が消へて
草履ぬぎあつける道をいふのも方言である

ハギノリヤウ、ソリ　萩の両文、兄弟同胞の仲つるく
ろうことを、仲々搖つる出れば萩の茎が生
長するを待ひ、四方へ延んくるとうるを背や
今はもの方角を無んるのん解くる、

ヤカミコ　嫉妬女子の意味である、子うきを嫉妬養
子　まとし比後つる生ん出て比る供のこと養子
が段不から世つ。りんこ来て家産を相續

するりと嫉妬して、嫉ぎ
りして生ん出て来れば
ふ民肉の命名もあ
る、

ホツボダイジン　身代
限、乗れ富有の家
の没落をいふ、

芳莫提心ルよりも
も、発菩大畫と
ものいひらう

以上五十嵐力六十一茎
集り摘出

○自分が実人と初めて出会ったのは二冊八半摺の
の出版部が版元だが、今の二冊も我々うちへ馬鹿
庵とうつしたが、極彩色の四分で是は版元と
ゆ二任かせ二冊を一冊に纏め形を四六倍し二時間
の式部分を除いて印刷させたが、七百頁を上ぼる事
なかなかの印刷が半人でとうとう検印を奥附に捺す
ようへと。極彩色の四分の是は上品の分の
隨筆に頼山陽を出版したいと申込んで来た、
今は亡き名い庵の人で極力北の書の紫検印
刷者を出版の不行のうちの一部の高義
辺であるのに、金も流し、出版部が最終に校了と
第七版を出し庵主とうとうとうとうとうとう

ゆ元、北が、隨筆山陽
を出版してから後数
年山陽の関する種
々自分の書いたもの
いろいろの隨筆を
集めてあるが、先年
七、八遍出てからの
改版の前の版の
好とする所は南方の多いものが
うとうとう（十二月十七日）

○自分が最も始め陶業に若者が弟の後を
術の事柄のまるのと人の刻くんとまるのうちである
どうもキザでいや嫌味がさる、近世諸流祖の陶
河流が自家の経験を書いた世界発祥と
系陶業に於為と言のうちかつまりこれ人こ
刻くんとまる陶業でキザでるこの人
生意が深研を携ます、世の大家○先
料とまつてあるうち何人の者達が立倍の技
○四十寒暖に酒と恩流、魅流、雲流な
とうあるうち自分い更うる神流、雲流、慈流、
瑞流、快流など連倍を追加したい。
○書画の大悟い概して価が安い、大悟を考きお

ろうきの画家も和尚の骨を彫り、傑作を多い、獨
意の花も地部数多ある、画家の中ある大悟な
らも先で押醒することもあるものある程、雅楽な
業を捉ふまで、巨悟でるけんがうるのうち。
仏大悟とまると値が安く、同一業で者であつても
戦割も違ふのい弟子の中のやる思いんで、慈愛
善画の家の床が小さく巨悟が箱うういこと
である。寺の床もい大きいかるる巨悟がうけれ
おのつうういが、その悟が世界で出ると買手がこい
床の大小が名書の値を左右まるといおのの家
ことで、業術を昔濃流まること沼いさるを濃
ぬ、自分い巨悟を作すること大多きいから

どんなものかけらんるが、巨悟の押意をしたる書画を
なる教かあるかけれども、孫とするの芝の別庭巨悟
を思ひ合の書をこゝに出のでもけれども、真の教は
味い難い、多くは日根野弱山の書したものを海るナ
羅漢の巨悟を知つて来た者も高かある。こんが
ようの聯座でいもあるが優るこゝ三ヶ月の値は
外んちへかこんの人情の方で六七十円とこゝ値
であると言ふ。西の横手人で定めのことこゝ実な
馬鹿くしいことであるが、おなじ相場の標準程と
うくうういうのはるく、自分の教師しうる巨悟
のあいのまあつくのと、[illegible]
○杉村廣太郎は禁人冠と云ふもなんまるが

此の名の禁人の体撰〔冠まるえ〕と云ふ句から思
ひ出すが、本人の言ふ事と、米国分使館
勤めてある時、とルクハットの函〔がどんもこんの函
で間違〕いあいのが、笑ひ出した時、禁人冠〔の意味で、相る禁
人冠〕と云ふ、笑ひと自家所有の目を忘れしたのが
此●まつひ、後の経ることが出来ない
る通の名であるから、支那の名流の押意を頼
人ひも曰禁人冠先生嘱と言ふことを躊躇したの
元の朝鮮を行つた時禁人冠先生清嘱と発
そちきらの弟子と言ふ人が、どうも言ふ
謡かと学いて見たら、昔の禁の俗の人錦儀と云ふ
墨の国を国いれて獄舎のやうなもの、曾て禁

を脱かうとされるのを、杉村も義之に向からぬ
はずゝゝず武者義を得た。実に文部の為ならぬ
べくやンチームをつけるなどいふ始末し比流行
るのは、他人からこれの真似て沐猴冠、無冠人、
楚猿冠、楚人冠などさまゝ似寄りの名の
人がとうぶとて〳〵世に出の中に出る
○人間の異奇の甚しき例は日露戦争祝勝開城
の報の日本に伝つた時と、日本海大海戦の捷報の来
た時で、楚人冠の陶然「かれらくれ」にたのめく
紀〳〵せる事

祝勝瑞義の弾丸を乗新聞のかしたことまつ
いて云へば、何人も事件が事件だけに、特が

正月の二日のことゝ、この弾丸の恩ち大義を人乱
を呼んだ、弾丸何の切の為に花の前まで何の為と
弾丸の意は一時に発射して、どうする整理がつの
ゝ、乗客が二三人抜剣の剣を刺した弾丸の意の
悪心記念乗客が剣を抜いたのは、山三宮駅に
悪待ちと云ふことをあるの門前が多くあるのだ
かく、帰輪前の九で義俠をふるふ祝酒の杯を
挙げて、勇壮が起る、そこへ出入の人
日ほど主意がつきゝて帰輪前まで、人もひるま
地の人々が行き届かから入つて来たかどやくと下
駄はさのまゝであるしかけて来て、えが祝宴を用
やうに、いゝ気まうとも祝酒の杯を挙げて

高岩を吹くがごとし。誰れひとり気を塞ぐことなしとぞ。

二月日本大海嘯のあつかひ、まさかあんぞ早く今[illegible]嘯も如何まるまいと思つて、自分（楚人冠）の人氣の構へて朝から相撲をとる。行つてみると、ところが、盡るくらゐ海嘯の邪魔が次から次へと出て、何般か沈められ、何般か火災を起しなどいの報が、お撲場へ傳つて来ると、さうすると、場内の見物人がいつぱいで、お前する力士の名も自分ら淋しくなつて、そこへ時の[illegible]お撲の立合の行代[illegible]ない淋しいなあ[illegible]張り手ひとつ[illegible]

はり元いまの位のいろは思ふが、常ならば一寸綱を引張ることもするに相手の番をあんばいさへすれば、引つ張りまはしもするあさくらあつたらば、軽重をもつかず、邪魔がめるに人心を元禄さそるかいんなかつた。

○為後酒を廢まることの喫煙も廢しに。えんが為め手持無沙汰で困る。已むを得ず書庫を手帝沙汰、信の法ならいあれを見るが、二の一番迄ゐ新刊書を繙いて見ると本屋が無くて困る。そこで自分が煙草代を節ふ代りに、ちさうと本を繙いて、実に一寸まんが保あるも及ばぬ本が多いが、煙草ならいから本が堆積すると、自分は北一郎の図書

を「代烟書」と名づけてみる。

○酒を飲めると牛乳がうまくなる、二十五六の時始めて牛乳のうまさを知る前大患の後の羅かうの時飲むと、気が爽快になる。西洋詩人の詩を読むつれ、かくれの弱つた時養ふやうな気がする。ナルスの詩があるが、牛乳は真とソフトナルスである。母の慈恩を忘れずして牛乳のうまさを味ふて慈母の乳と念いとるを得ざるべし。あの真白のあの柔つとりした肉の自然の甘味、何物も比較すべきものなからむ、美しい牛の乳を飲む美しい女の繊手である。工藤家の乳白の色と云ふ、こゝに詩趣がある。陶工の未来が此色を出すに成功した。

功しに、兎角困難であるのは乳を煮ることである。竹乃屋などの未来の成功あることを設期したが乳を全く脱し得無かつたのは、うまい牛乳の味が乳を和して都下の牛乳の河豚となる。牛乳の ふしぎ恩流、恵流、恵流である。

○めの女世の中の無つたのは、どうしても死なぬ女の一身上の不身持で死を覚悟したが、自分は迎変である。

ら思れのきし、殉職のやうな概を待て高所を凝して死んだ。まるかと思ふと母乳が実子を殺したのである。美人は生殺しと云ふ、盗賊は殺さんとして殺さず、七ケ月の傷を受けいし。

藤原製

右の子ども父母共病で用が不手人であることなき養を願ふ
よりて願ふのは殺す時其の妹の手つかいしたることと
殺す前の志きん北今治くに生命保険入が入り義が六番
武千円二度人びとのかとこふうもあるうく北の父ろうよ
小木浦の者と殺さんが息子し不日出行ようと父はこんを
毒薬で殺さんとしたことがあるとこの場は料理の四工
口四ケに毒薬を入れて殺さんとしたが息子は其食を
庫の上のぬ生母で殺するもつれとふが実母が殺
る所業と及人がのん婦るのことも倫理問題とも
答ふるべきことがある。
○佐渡の小木教育会が男化とうう紀元山人の句
碑を小木海岸第一の景勝地城山公園ここて

人をして募金の材料をとて余の拙意を求めて
きたらうと書き渡めたる半折五六枚を送
へば紀元山人の没したるは本年三十三年と
なる山人が文学の師匠の一人なる人び流連した
所は小木もあるから碑の一の位置つとよい佐
渡さん古来えくの名流が流竄された所柳紀
念碑は小比叡山(華)年峰寺に蕉翁碑南
の碑があるこの三碑と云へば○この碑紀小木
町教育会長塚谷徹氏が醤油を業とする
家豪氏先年特醤油の看板を書いたやつ
が現因がある。
○昨夜敬十紀(二)癒後の(敬)と街頭の(夜)と

三三を放ち一比中さ高あり或比のい動事と長骨
が高ちとこの比。遣骨の弘高と異し相手の礼を盗
さ祭ぶらしめ、うう庶が比が、えんを取りの素ないと
云ふ比男女なんこう遣矢をうくとこの方男の方
の長ここうないとこの男子がうくお生さうかしの
あるが、女の男を較へると注意深いこうひとを
こうとこの比が、女の遣矢の長所庶に高きいと
ものの、女の長所庶やだいトトは入ると長所遣矢
中ようう拶帯をを高んのとうくう別しん比ま
しいよの病を又少し比時ちといの子も高んのとうく
ひのかの高んをこう置ちうしかく、えんが
祭祝廃く注意ちつもくうの推をあるとうの

おれ。
○物墨日の今あら一冊の日記を拾つて来れ、これを可
今し特ち一長近と撰らくれ比。阪味の日誌ひ詩歌
自由日記と紙筆と書しもあるが、成るあど文所の詩
歌を蔵いろう拶りまし一冊が高るのび一すレヤレ
夕ちまし、詩歌の清ちまし、ちまし異日稿や異後卿
ちまの画が又へてあるが、格如ふしに、ちまの遊ん
ちのが、こう粒の日誌と「自由」の二字が使いの人ちあるが、
めび、自分の四十年も日誌を一日も欠かさず記しもあるが、書
遣の罹紙本を用いてあるから、夢を世界ちふんしも
変つてある日誌(洋装の)を買うひこと七ちく、ゆけん
下を見れこうも無つひい、数年前から特又紙

誌が死者をよく責んることを少へれこと分あり。多くの
詩歌の活用法に、月と日とが、いつも引合せて、高は其一のの
又行事、者花の性復、今は別るの詩概が備つてゐるを
一寸見ると使利な出来ものゝやうだが、実際さい人
こゝの今日を全くつけらるの人がある。者花の性復
をもを者かるの人が多く、印をる人の観業概
で、必要のるを者き入れる、或は偶意のとるを者らあ
るものもあつて、いろくの概が何れの用もるとが、所
詩概をとるこるのに、そこで詩概をとるこるこ撰しるこるの子
るの人の気もうるを求めるこる。硬るこれのが自由の
詩でいんをるこるこれのが自由の自白をること楚人冠が
とこの、陶分馬鹿氣だ工風のである。自分をるこ

四十年前のこと即ち日清の初めから自由の活を用
ひてゐる。自分はいつもひとりの洋書の美を用ひる
ものは洋書の自由を活を用ひてゐる美の自由
の二字を分くれのもおかしい、さんが大いに美んることも
もおかしい、楚人冠の分命名したれば、ちるこの家行
者が高橋修四郎のこと壁紙したのが楚人冠も指
を嗜むことこうもが来ないとこもおかしい、箱墨の
如今では其の意味に成ることを詩義自由の氾と呼
んでゐるから、南橋修吉とこるこるこるこるこの、義
し詩義の二字が無つたら、侵害とこるこるこるこるこの。自
分は自由の氾の由来を知つて一笑を禁ずる。詩
が、世の中すいこんを数すこるこの分跑分あるこるこの。

昨夕デパートで買つた洋紙製本の淡い十数
種を新しくしたのに、五種類程の横の罫紙即ち日記用紙と共使ひ少日記帳である。
書一度中途とだまつたあべきことが多くこんを一日を
多新年後度か三の書しても書き入れ得るやう
まつたのを書時間日記とこの分類。●こんな
朝の六時から夜まで人の寝るまでの時間を
一行づつ分つて、そこに其時間のことを書き入れ
るやうにまつてみるのが多い。今朝の法とこの
ものを主として計算のことを記すがたびあるべし
計算の結項が仔細に記まんとそこに書きこし
多の出来るやうにまつて、日誌は後と今朝の

ようなものが多い。即ち理屈を抜び
ユーモアのの実用を通じて各所から出す
神経の日誌、先の備忘録式に唯此丈日のことを
忘れないものの人との約束のことを書きこも
さしまる前のの法が実際の一番役に立つ記
しんい日誌と云ふ毎日の如きもの抜粋
自由の記の名を思ひついた慧人冠が
此の名称を賜えること前に云ふ公日
人がこれを得す自家の流の日記の「訪の記」
と異なるが、何んの仮定もなく、各頁を
何の特定の欄なく、唯此上頭と最頭らしい
一線を横ぎり、上下共界線があるのき

ある。

○白河楽翁の集古十種は文晁の編纂であるが、実は
編纂と共に此地の人々を率ゐてゐるが一向知られてゐない。一概に
文晁の編纂と云ふと何も文晁一人がやつた様に考へられ
り易いのであるが、思ふと云ふのは此の地の出版された
ものが既に出版されて居る大部分であるが、出版された部分が矢
張り家と云ふ事に対して其れ人から云へば亦自分の模写
谷木村蒹葭堂の画像を文晁が写生した所を知
指したこともあるのだらうと文晁が互換した自分の手
であるけれど、思ふことは出来ない。当時大名ならば文
晁が其の編者を補助した様であるが、他と実際と共に
此人物が下様であつたことを思ふことである。

が備に平福百穂の紹介中(秋田)の稿残して後本
時浄く出版された)を読んで見ると、秋田の人で画僧白
雲の伝が収めてある。此僧が集古十種の編纂と共に
れらしいことはつきりと右の如く記してある

南宗画人として立派な腕を持つてゐた白雲は、羽後
国仙北郡六郷町本覚寺の住職であつた。生国は
京都東山であると記されてあるが、其れが確か
であれば、今審らかでない。本覚寺の住職となる
以前は、白雲が画僧として活躍した時代らしい。
彼の白河楽翁公の知遇を得た。文晁のみならず
しらべて此やうに働くらんな「集古十種」の編纂
に従事した。

白雲が集古十種の編纂されし頃、「真澄
遺覽記」所載の一文を引用せられし、
白雲居人白河書寺の住職中興の御
大師白河の特定信仰と古十種ともはゝ御
輪番の頃より白雲居人内命を受け、近世
通暢の法祖御寺の重寶古書古器古墨
とゝに蒐集し、そが序文にも自らも
記の殘されし古跡古墨の拓本
の拓物少からず、此等の三軸は云々
とある、又六郎沼華業法」と記したるものとあり
(前略)白河法皇の勅願により白雲居
提所白河書寺住持とす、全く僧名に數

頭白上人歌集

奥州白河人 俳諧 白河居者 茶山

元錫法名 動歴年 移住 上人共典 茶山

陸通神社、助作政分集古の扁

贈大野萬年 [illegible] 奥州白

[illegible] 法儒法侯寫真、如意家法明徳神、関東合

多士、新豊山岩詩家

大空萬年とゝもかが白雪と恐行し宮士の神助後

でもうしたことも云へて完分

○太川重年とゝ人の浮世俗物かく出し人なり、高

き高の書をかさ人物も珍らしい山あの高い人なり

つた。自分の田舎なりこゝ田舎なり田舎なり、誰高家

鄙び酒屋なり行儀正しい神系の人であつた。此人い

五十五歳で死し、萬年と称された。平福の州宗

小流の此人を義術家中の義術家とゝ云へる

氏は全く義術を宗教的信念を以て

人がみれば氏は義術的良心の動いた時のみ描いた

ので、自己の満足の行くまで思を凝らし苟くも

世に描らふことを一切なかつた。美が為の此者と

作かのうの。氏は常に後世まで殘る作を

一作と云ふ。茶山の本業をうけ。殿山の本業をうけ大

師の信仰を厚い此のあの人の一代の名誉で他の

ちく殘らしめんとの信仰の義心を持つた者の表

日が来ても作を出来上らうとした。俳諧日記を納

めた、ちとび仕上げをしたとゝふ。この人は義術

真心で大分小言を言ったり又手を引張ったりすることが
常だ、偖て学問の素養を特に人を困らせることを
セリ素質の通入って接客術に大変うまい人であった
ものである故に大変に楽しく接客をもとした例い方
少きい、此人晩年に到り性格が起り是迄一生一代の名心
を捨てさせたいと云ってあれこれ増しいろ〳〵早く没した
此人の親戚恩義の人が集る所へ
こんな事例の一面を語るものだが、一緒に旅行した
ものである。汽車の時分と同じ人数が無つたこんな
伏城まで行くと言ひ乗りを誤ったと
川原が下駄屋を営む時代、私が子供
イを拾ったやり、今も新聞をはくとき、靴の紐

が伸びること、まあさう云へば、トランクも時代に就てやう
自動車に押し込んでやって漸と汽車に間に合つたこ
とがある。それから或いはそして病院へ行つたのも夫
川原を解剖するとして時分に病院へ行つたことがある
病院が出来た時の本高のしたこの間も死んで
今も流したものが古川に平常考へ為者いて
あるのは死ぬまでは悪いと云つて、時で笑つたこ
とがあるとか
氏張する時いま中宮寺の善隆の学に集つた時嘔吐
を吐いたと云ふが最が立十年の生活も表が一生を
通する義術も清浄高潔卿かの汚者を止めた。
最い実を生んでそして善隆の学の上にあつた

のれと、百穂に言ふとある。百穂は吉川の絵を左のごとく言をあるに方りて、大の絵は全く我日本画壇の宝宝なるべきことを信じ、先人及び海外について来る人々、あんぱが美しい絵を描く人は再び出て来ないと思ふとこそあるべし

○平福百穂の川端玉章の門人である、百穂の竹宮小説を言ふ、先生が木蔭から出られたもの、いつもの格に、先生の画をめんどうを見ること、先生が私を向こうへ、浅草の中也馬車の中でも出来る山水の元取の所、死守れ大事を秘訣を教へるとやらうとおつしやつて、次の歌とおくられ

杉の林杉のうゑ木の[illegible]人家への[illegible]酒の[illegible]
の絵、

○文人画と似て非なる状況が市に示す、義貞軒蒐集の反研兼に附属文房具の目録の反物自筆なるたのもきこゆるなり、皆与謝蕪村時代のものとされしきこゆるなり、今時代ものの式のものを珍とし以て、人々に天平以上溯らざる物なりと思ふこと必ずや、銅の表面の如き[illegible]同じものなるべし

○[illegible]の刀は柄と洋[illegible]おもしろくの光へとなり、庭は円形なり、白金きの応安と言ふ文りの雅きものなり　九品二万円とする、一説[illegible]之　十二月廿二日

無佛而稱現

清賀宮筆頭硯

水滴 天正年間所造

墨床 長柄杨桂

筆置 紫檀一枚 天正中物 赤木一枚

筆架 [illegible]以黑漆以[illegible]之別有記

朱硯 以古板硯[illegible]之 [illegible]皇兵檀

印匣 以紫檀 [illegible]人自製

花卉 秋[illegible]作秋桑木者

文印 [illegible]限川埋木

書刀 [illegible]二百

糊斗 [illegible]

硯匣圖

水滴

印匣

筆架

朱硯

書刀

墨床

糊斗

匣 以桐集生檀合造 古匣貫古匣則 [illegible]所[illegible]家三百年來所[illegible]之硯匣皆在所傳

の印人より栗山の手紙二通を贈る、内一通は栗山
が公儀の御意を受け時吹聴に出る人に手紙を出し
月末の四附賀島出雲守に持つ死に紙を書き
天保八申年四月公儀より御尋ねに出し吹聴牧と
なる、　文面左の通

一筆啓上仕候今般和儀
以御仕合を以御尋御懸
被仰付之合於聞所
出羽守殿被仰渡之趣
仕合を以太郎兵衛吹聴中
らに出張仕候

栗山　彦

四月十五日
賀出雲守様
賀与つ様

老人ゝ中ゝ

邦彦

○百姓が父の稽古のうちを聞いてみると中々父の大
変で大きなバクの鎧をもらけて美を熱い湯船を
かけて出るのにこまります酒も絶かつけてすが家々
は用ひまたんもしに。小兒の時ゝ天然痘の係つれ面
から後がぬきであつれと言ふ伊藤ちゝを出いてみる
時フト席を立つて部屋を出つて又立ぐゝ帰つて

然一つて業をとる、此をみうれ折くんですうど業時
をさしあをるのが方法の様ひあるの
の数巣中久方振り方拡張さ立寄つれ、ちさんに一冊の
本の西しく赤條碁の自著ひ、黄金用紙
制紀」と碁基本ひ書しを出る、各藩の黄金物を
とが拡してあるこんが方面藩の校制をもめるこの
基かの関係がなるのいたのい、荒しとうれとまれ、買入
つてもらんと、ぬて数しをとと果して方面のるが方
なんとあるる、第一日を角
び黄金家根雪おるの方面の雪のるいこと
一百二十方
陸国の初論他国の人一向に為れるる様
入月

仙後上数城郡の雪積る四五尺積りて
家根ら氷雪を多人物をを堅石をる
ことのぬきを砕き割り投義し表
以人手拡ら
黄金独体雪国い雪うど留と并雪踏付入月
百五十方
是の西北方い蔵又い蔵(郷)ると間口と宮の
沖産方蓋き相国ひ紙業の雪踏望の丈
上をこ通ら太板と儀世上ると知りの
寒国の藩ると雪の千方い基以入月
天のと地寒国ると物と義業稼ぎ入国の多
きことが方れるるりて下りり碁基が方

四三頁今年まいれとあると尚のこと学校制度の就て七琴台の事が委細書あるが、こんな学校に書出し、北海道の事思ひ出すと云ふ書き振りであると言田舎校の制度は実に一寸かもしれぬ、関係書類まで相和するように行かぬ、北海道移民三十一枚、書状の新し紙を伸して其を用紙として書いたまひ、各紙に東條氏、原とあるので、琴台の自筆であることが確かである、高田藩の郷土資料として大切なものだ、琴台は明治以後高田に帰り、成底の墓面国寺に葬られる出遇つて居る、

○画帖の大小長短格好、色々あること、との就き前に書いたが、近来の画家が展覧会等に出すのを見ると、左程の型を殺ぐ、此のまゝ行く悟るまで移住と云ふ、衝立か神社の絵馬額うでもあるかの如き格好のものと書く、概ね竪かあるかの如き、横かあるかと云ふ方形を近うまうまう横かあるを、何んうと京本の現代家風を入れてどう取扱うかさてまう西洋画を賜ふんを仕事を困ることき、観かあるか画家自由に書けて都合かよいと云ふ所から割出した形小型方形を近ういまあるんを就て面白き竹宮の話を先のめくるとある、

かくのごとき方形が低しんる故なるべつた理由をもとら
一般にいふに、西洋畫が方形の畫面を採用した
のもとより、日本畫も方形なるべきはずなれども
立体の影響が多くあるもあるべく。また畫面が
洋畫の大きくなること、畫面の形が自然と方形
に近くなること、しかしてその原因が畫面が
著しく安定的なることもあるべく。自然と安
しく安定的なる能はざる自然の一部を截り取
つて之を畫面とするとき、方形いかもも
便宜なる形なるべし。もし等の幅が上下のもつて
畫面の縁取なるべくして、光を埋めるべき
どこうも無記が出来る、この畫面の来歴を明し

て自然の自然形を畫面とする傾向を生ずる。方形
形或いは長方形から形が変化し、長幅
を得意とした南蛮屏風もこの例の白地
紙幅をもつものが、次に紙の端から端
まで書き埋めた、例の白地を上風が、この例の
畫風の主なるものである。
徳川期の文化文政度に行はれた行燈形の画幅が行はれ、
これの正方形といふのが著しく
が絵のもとでやゝ西洋形をいくく
今の書畫界の始めて形から形へとなるのん
一般の傾向は今の行燈形を通つてきつてあるのも
奇なり、立来の畫幅の形はさまざまで美人風の畫幅はさまざま

かを取立てい幅とまるから少さく、卓を床に置きそれ
に花瓶や香炉を置くことが定まりてあつたれの幅
は横幅が多く、支那風の南画をまとふやうなり
から長條幅が出来た、まづ幅が狭く出来が格好よ
しとされ殊さらに今日書画屋が俵を定
めるに此点を標準とするにあらざるか、此標準も其あるも
要するに成るべく、併し横幅の如き細長い紙を
六條幅の如き細長い紙に
用ふるに、元来は西洋と全く異なる点にあらざるべ
就て、平板の比なのを説くのである
東洋の画面が西方形であるべき理由がある。東洋
絵画であつたるべきの理由がある。東洋

の山水画の事の中に注意する心持で画くやう
しといふことは、既に宋代から注意されてゐる。自然を
延長する心持で山水画を描くことは、西洋
の風景画のやうに、一画面一視點のことのとなら
ずに、多視點画面の中を道に沿ひ或は川
に沿つて動き行く筆法の如く動
いて自然を動揺するやうに、画面は上下に長く
なるか左右に長くなるかあるべきの理
一画面一視點の態度は自然のやうに画面を切り
離すと西方形のやうなるべきの
なるも東洋画と雖白が方一丈の画面が山の中や川の延長
や森林などの延長で雖も、画面を切るのは

ある建前から来て居るのだ、帝国の心臓の繋る所である
り、日本魂の大保証である。その紙面を飾し、世間の
不安を全く想像の上に生かすることも亦面白
のことも亦興味の形の変化と共に破壊されてゆくであらう
四四年の年の瀬、紙屋底をたゝき堆たうと見るのは、
往々その日記帳である。前と昨年の日記と新しいものを
和紙を新しいから、文彩をこしらえ直し、新しいことが一
二ある。実に自分の幾年日記を継続してゐる
のは、此點に人後に落ちるのは近年稀なる。南
日記帳に注意を拂ったことは、南
流いろ〳〵の表の日記帳の柄、新と昔しとの
違ふものが、日記の往年の面白味多いのは多い

一驚を喫した、九じんの帝国に入つて見ると一台
の堆積の色紙の詳視すると、ガツト
驚くべき、五六十種別のものがあるから思へば、昨人
ろの今の日記が多く、十数日記が多く、家庭の家庭
日記が多く、台所日記が多く、和歌を添る人
多い所日記が多く、俳句を作る人多い俳句日記が多
賛山者の賛山日記が多く、スキーヤーの多い
ものの日記が多く、言葉の（英文カメラ日記）多い
（国勢日記）（特産物日記）
実務の日記が多く、宝物日記が
多く、思想日記、心の日記、人生日記等々自分が
見て記憶する所のものもこんなものである。多くの
日記は細工を往々の柄が設けてある、或い格言や金言

やはり美文ばかりを書く人間のもあり、また高遠を樂しむものもあり、実際の隣人の役に立つものもあり、そこで自分の日記と書く人間と全く相違を設けず、誠実を旨とするのが印刷日記の欠点である。原稿紙を一冊のこれ丈のすぐれたものを見ると、前年の日月のと本年のと対照に耐し得る様のものもあり、六十年の直の比較に三ケ年の直のものがあり、心の日記という思想日記などの比較に出来ておる。自分が此等のものの面白さを思いたのも鍵日記というのがあって鍵が附随しておる。えの日記の秘密を保つ為めと実用

七人ともある。実際以上の報告の日記が事実の経験の日記ともなる。日数を切り比べ思つてみるが、日記をつける習慣が[illegible]遠き旅に行くことに[illegible]まこぶべきことと思ふ。

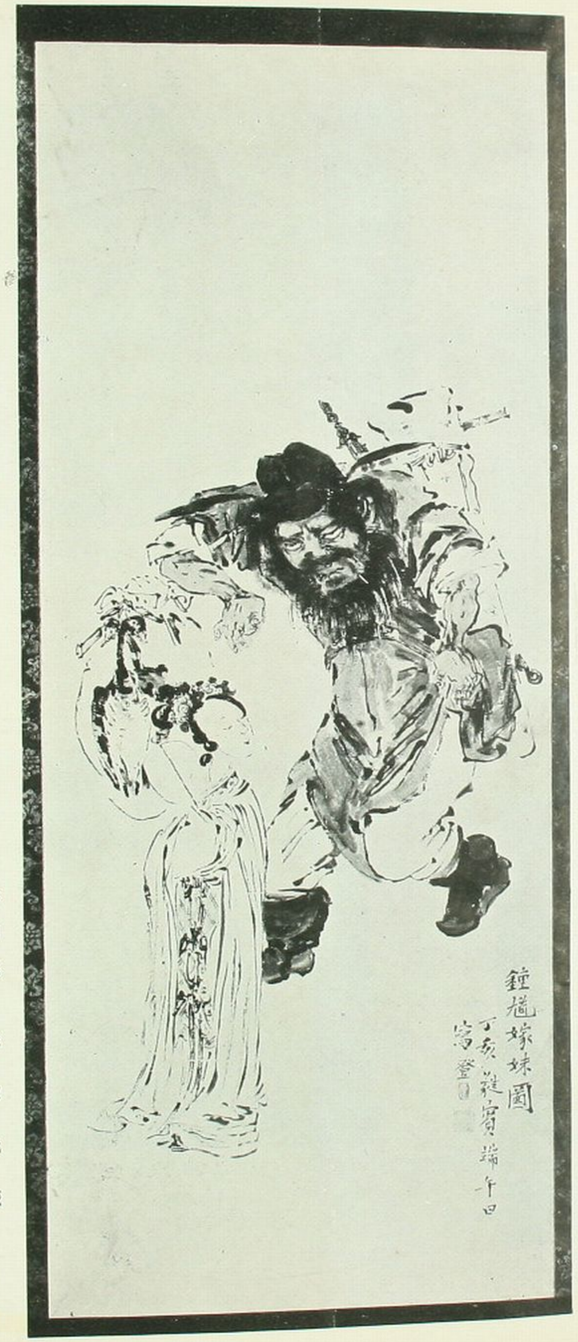
日記と鉛とかくるべいうるく入会社が設ける意遠を樂しむ。[illegible]契約をしたこと思ハるこの七多くある。[illegible]幾ばくの三角社が、ある日記を表紙の[illegible]に新しき表紙外一寸程の紙が出ているのが[illegible]あつた、[illegible]その紙の比較に敷紙の[illegible]の出来るやうなものもあり、こんのメモで大変を記し、日記に書き立て材料とされたのイラボレーションとの一例である。

○崇源寺殿の遺品中に鍾馗嫁妹圖を掛けたる所也、余は此の絵を愛する所也、即ち前記こゝに掛ける時に巻を開きて見る事一度也

昭和十年十二月廿六日

書畫骨董雜誌

春城署



渡邊崋山淡彩鍾馗嫁妹圖（名蹟過眼漫錄記事參照）

（紙本條幅）

靜岡縣　森淑氏藏

○陰日出入り書畫高八尺四寸の大幅なれども未だ表装全紙の馬溪

河門の国より、別に金景一巻を添ふ。北八南高と称し、世間にもくちずさむ。南池提色無名の達家を世に示さんとつめし時、北人とも宣伝し、井口一代其面、鉄海宮名古屋を見る。北人の俗ちり、曰く小西皆金、名古屋本町岩崎氏仙蓬の公俗事を以つて陽五中性を合と称す。伴つて唯と俗ちり、俗と者の中きに人らを得ることを慮とす。家侍業時に流浪し小西氏の壁となる。苦を某大臣に訴へて活路に帰び走る。諸まる所あり、二十一年家族すり耶馬渓恢復の日、次廿年　心の本也

日蓮聖人の遺書の長編に、法華の長編と称し、多数に上る。北の集数に近験かりしも一向夫天門らるるに熟して居らず、愛情のあるを長ること忘やうるるもあるる。大震災後家を心の養花石全部を貴つ比が、其後ボツく集めたるあい敢てるるるが、為と志後を入り、死後どうるるかと思ふ。窮乏生前一度全かるる花かすと示氣も動く大震災後の未曾有の長文と評判を取つた程大袈裟なるやり方でセうしタが、今ぐい折角自分の宗旨に最心を金かる流条くてしたくない校の業かしと、椎国とい寺割長すること とるる比。椎国に関係ひあ、寺祖の現能もあるから、そこへい自分花寺

の内で目録とこそよべき部数を提供した古版
古宮経古文書、名家宮本四名家千商と為
千の古書部数で大價の自分好價で二千貫二千
五百両、自分の義也の七分通りこんびかんけいいたが
強その版本部数でどう変分まくきや自分も変
の色々。既にある部分を手離しにかくし此前さと
とく関西の出版まも相成して変る事の器ハ
ハ変立とさると價四か元勝まるまるで手数料
や費用がまくまくるかくる一概と得とさると云い
んまへの自分の名義を振り四いすこも四庭
とあるから、文行量機屋に托まることう此実
ハ変実後、実印の後更まる数年間いまくの此の

横原刻

ハ変から買ひ入れのもの、売と托することが出
来ないのと、十一月中に仕末をすべき筈也
ないが、微志の行届き出来ず、此の事情
まうて、二日ばかり前倒を思ひ、あまりに
を出した善五本と跡者とを大体売り分けて見
れが、あまりのようなりの、戎分あり四と割愛し
れかるれある、戎冊ばかりあるが両人ともそうの紙
んで六八許の山が十五程もあつ此のまま文行巻
もしてり所位分を計算きめ此結果の

弥者部数 千五百四
特別品 五百四
美当品 五百四

メ二千五百四

と云ふので三千円を満たすものを残品を[illegible]
と先づ前年三千円を及ぶやうな[illegible]残品
べをしてみる。実の稼ぎ値の高い本を抜き別ち
かもしてみるから、[illegible]値の低いのも止むを得ない
と思ひあてるまで。但し、金石拓本（拓本印譜印書）と複
製本は全然売却の附されずにある。これ等の他の方
法で売分するもよいと思ふ。（十二月末記）

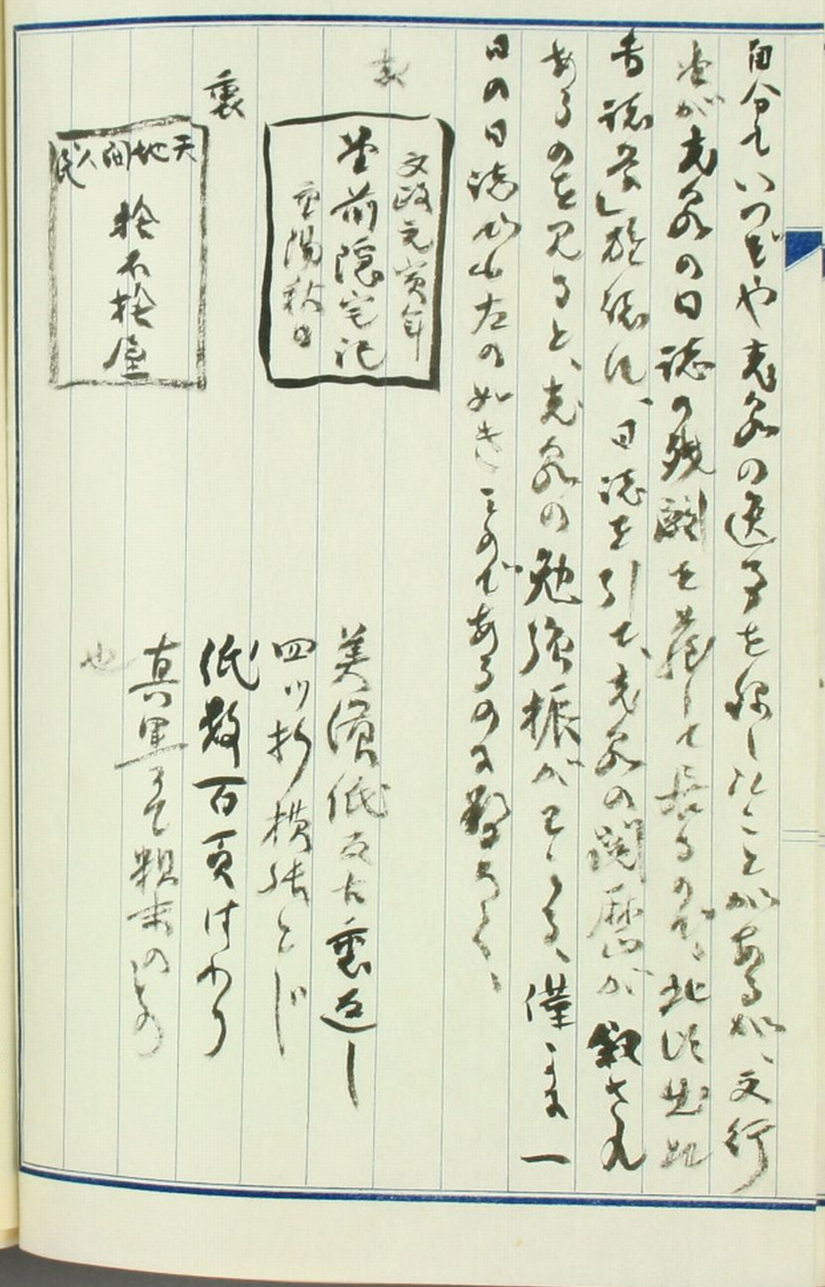
年毎売分すべき部数

印の部数

印譜印書　金石拓本
書画部数
骨董部数　小品　廿（四千冊）

複製本

洋製本
師友書　岡[illegible]
以上の内書画部数は[illegible]
（洋製本七百冊）[illegible]
ちらさん心仕来の成[illegible]
口拓洋志家と云ふ市販の裏うまうま、北斗の
通称和風屋次郎が父庄八が[illegible]
三書肆を[illegible]
和風屋の屋号があるが、元次郎は初代[illegible]
で一貫二百文を資本として本屋のセトリを始
めたので、一貫二麥岳士の郎が[illegible]



か、或は錢一貫文・麥二斗を資本として家を成した爲か、何れでもよさゝうである。

泉庄は其後家道榮えて、晩年店を後嗣に讓り、浅草堂前（今の松葉町）へ隱居し、文政五年三月十三日病を以て歿した、年は五十四、浅草龍福院へ葬つた。

老泉は次の樣な本を著し且つ录刻書目外集は自分で板行した。

录刻書目外集　六冊（文政三年板行）
經籍答問　一名文會業餘　二冊　一ニ云經籍問答三卷文會業餘四卷
經典釋文盛事　一卷
品物名數抄　一卷
老泉漫錄

此の外にもあるかもしれぬが、私は詳に知らない。

三

老泉が精力絶倫の奮鬪努力家であつたことは周知の事に屬するが、今彼の日記の中から其實例を抄出しよう。

（括弧の中の註記と句點は私の施したもの）

「九月二日靖（晴）天

明七ツ時（午前四時）起。灯ちん（提燈）にて永覺（浅草門跡前永覺堂松澤屋庄八、書肆）へ行、夜前の荷物請取、よこ山町金右衞門（横山町三丁目和泉屋金右衞門、書肆玉巖堂）所へ寄、未不ゝ起、又川儀も不ゝ起。（老泉は今年五十歳、朝は早く起きて、提灯をさげて迄同業者の店を廻るに、同業者で未だ店を開けないものが少くないのである）

金右衞門貞和板無（夢）窓國師錄見セル。川儀へ先日かりの左傳註疏一冊返シ。史記世家部二冊かし。

松本平助（江戸橋藏屋敷慶壽堂松本屋平助）寄、是又未ゝ起、家内衆并見世衆（店員）不ゝ起、尤下女は起テ居。三才圖繪半本（はん）の事賴置。

芝へ行、泉吉（芝宇田川町名山閣和泉屋吉兵衞）へ寄、半本聞になし、素問次註を閲。

岡嘉（芝神明町尙古堂岡田屋嘉七）へ行、種々半本合せる、揃品分預ケ置、後風土記二冊かり來。

泉新（芝神明町二酉堂和泉屋新八）寄、留守にて不ゝ逢。

宇田川町酒店にて一合半、肴二種、七十二文呑。

歸路松安寄、留守。須文（新右衞門町須原屋文助）手遊見世初て見當、寄、女房久々病氣のよし演說有。

萬太治（蘭香堂萬屋太治右衞門）にて、尾崎修平（井上金峨門尾崎鳩居）手澤日記・岩瀨學問解・文集三部借用。

西彌ニテ宋板金澤文庫太平聖惠方小兒門部、并古寫本ニテ傷寒門舊補字ト見ヘル熟覽、天下奇本。

御神君樣尾州侯へ進ぜられ、片端ニテ、何トゾ手より持（手蔓を以て）尾公へ入タキモノなり。

鴨伊（日本橋通四丁目鴨文堂鴨伊兵衞）へ寄、無シ咄。

山城佐（通二丁目玉山堂山城屋佐兵衞）寄、彼店半本帳閲、注文、農業全書五ト十、論語國字解四、入用の所、松平行、三才圖繪入用の所なし、袖珍略韻上、松平有、詩經古註江戸板中ニテ一より三入用、松平註文四日市通本屋皆逢

近藤重藏（正齋）樣上ル、市野春啓（俊卿迷庵）、湯嶋益齋（狩谷棭齋）澁江道陸老子息（澁江抽齋）武家何がし四人にて、治要校合。紅葉山御文庫卷軸御本、金澤文庫傳來本ニて、尾州本對合（對校）擁書城樓（高田與清の書庫）ニテ、兼テ、守重（正齋）主人前度噂ニテ、拜借出來の節、一覽仰付られの事御約束也、拜見濟。

御文庫本十三經校勘記拜見ス、阮元作釋文其校證アリ。

伊豆般若院藏本大般若經一の卷拜見ス、源朝臣尊氏公開板也、跋文は守重先生模ス、板面屋代弘賢先生藏本奈良板ト申傳本等、則開卷一之卷跋文有、舊補寫一卷の內有なり。

夢窓國師錄貞和板、則湯嶋益齋（狩谷棭齋）へ、金二方にて賣、本ハ守重先生跋文模ス、內擁書城屋置。

歸路川儀へ立より、半本左の品持參、

素問一ヌケ・歷史綱鑑二冊也

金右衞門所寄、無シ談、若林庄若子來、活法（圓機活法）大本半かり、通韻學部ニテ入用なし、直に金右衞門賴歸ス。

南傳馬町なりたて（新開店）古道具屋、日蓮宗の仁、素人の時持本、當宗物、古道具ノ中へならべアリ、價問イトモ（價を問へども）なか〳〵遺（たつとく）（貴）種々嘲歸、

其內番神緣起略ト云平がな半紙本一冊アリ、價百文ト云、飜刻致度ト咄候ば、左樣ノ事なら、飜刻出來、一部ヨコセト云、代不レ取、初面ノ人にめづらしき人なり、餘程當宗學文有か、初面話にて不レ知。

柳原いも惣店ニテ、貝原點入本四書・新刻蒙求九ノ玉篇一部二卷かな付、都合四種、金一方半ニテ買取。

丹八へ行、留守。

新し橋通、堂前歸。」

是が九月二日一日間の老泉の行動である。よくもコンナに働けたものだが、又歸宅後コクメイによくも斯う細かく日記に書き付けたものだ。日記の紙數だけでも中々ある、驚くべき精力根氣である。

是で見ると老泉は、半端本を拾ひ集めたり、珍書や格安の本を買つたり、ツマリ昔のセドリ式の仕事をやる傍に、近藤正齋や、市野迷庵や、狩谷棭齋や、澁江抽齋の樣な、古今第一流の書史學者と會して、稀珍本を見せてもらつたりして居るのである。

四

「經籍問答」の中に、老泉自ら大般若經六百卷を修繕をした事が記してあるが、文政元年十一月八日に此の修繕が完成して本店へ渡し、修繕料一兩を請取つた記事がある。此の外老泉は、少しの暇さへあれば本の修繕をして居り、宋板の爾雅註疏なども、長いことかゝつて繕つた記事もある。

老泉は此年行はれた本願寺親鸞上人五百五十年法會の圖記を出板した、金主は老泉では無かつたらしいが、草稿や繪圖の調製、板刻、印刷、製本等迄、老泉が引受けて世話をしたのである、其の事は日記の各所に散見する、卽ち文政元年九月朔日に、辻五（書肆カ）で出板の相談が出來、九月六日には圖記本文の草稿を辻五から受取り、同日、法會の圖を描くことを北尾重政に賴みに行つたのである、重政に就ては面白い記事があるから少し抄出して置かう

「九月六日、夕七つ時分雨。

（上略）根岸北尾所へ、法會圖賴に行、北尾曰、北尾は則、須原屋茂兵衞（書肆）一族にて、則北圃（北畠）氏な

れども、名家ひけらかす(誇る)がきらゐ(嫌)にて、北尾ト付トロ說也。北尾重政は須原屋太兵衛子ニシテ、幼名久五郎ト云、江戸暦ノ板下ヲ書ス事、當年六十四年間ニ及、其内天明元年丑年、同二寅年閼ク。世ノ說ニ、暦問屋内此二年間、株主替候者、別人緣者ニテモ有、別人書スカ、必此兩年、天文方の請よろしからず、書ちがいも有ト云事也、此說は世の中云ふらし、北尾不レ曰、北尾氏當年八十歲、我父ト同年人也(同年の誕生)、天年ヲ我ガ父ニかさゞるは天ヲウラム、サレドモ我父(庄八)終ヲヨクス、子孫繁茂ス、北尾子孫なし妻ニモヲクレ、我父ハ親族ニヲイテ皆順ス

(下略)」

北尾重政と我が父松澤庄八とを比較してゐる所が面白い是から北尾と共に本願寺へ現地を見に行つたり、北尾の草稿が中々完成しないので度々催促に行つたり、板木師八右衛門に板代を先拂したりしたが、果して此の圖記が出板されたかどうか、文政元年の[illegible]載つて居ないから分らぬ。併し重政は此の頃から[illegible]で、翌文政二年二月十一日に、八十一歲で歿してゐるから、或は重政の繪は、草稿も出來なかつたかも知れぬ。

五

老泉は書籍の拂物の大口を取扱つたことも屢々あつた、九月一日には水戸から送つて來た古本の荷物を調べて、九月四日には本店の二階で、書賈を集めて賣捌いた。買に來た連中には酒を出したり、蕎麥を振舞つたりした、正午頃から夜子の刻迄かゝつた、此日賣つた本十二行李を、九月五日中食後車に積み、車力三人、老泉は宰領して芝へ送つた。

「芝行がけ、車少々手傳遣スニ付、のどかはく、京橋うらにて水かん(西瓜カ)立賣、十二文買喰……」

など〻記してある。此の後も水戸からは屢々大口を買取つてゐる模樣である。

十月十五日には數人協同して房州へ古本の買出しに行くことに打合せて、老泉は期に至り約束の會合地に先づ行つて待合せたが、他の連中約を違へて來らず、遂に房州行を中止した記事などもある。

十一月九日には文八といふ者と二人連れ[illegible]を立ち、武州久喜の橋本文弘といふ醫者の所へ行き、古本を買取り、荷物は船で江戸へ廻し、同月十二日に江戸へ歸つた、コンナに遠方迄買出しに出かけたのである。

十月一日には本所割下水へ、田舍ロの佛書があるといふので、態々見に行つたが、甚だ惡ロで、買はずに歸つて來た事も記してある。

六

老泉は一代に家を興す位の人物であるから、其勤勉と儉約とは、決して尋常一樣では無つたのである。勤勉の實例は已に上に述べたから、今度は儉約の例を擧げようと思ふ。

「九月三日(上略)夕陽より白山へ行、淺草紙一わみやげ。山勘にて灯ちんかり、鳥安へ寄、むねつき坂上り、本郷通り歸。久上へ醬油・酒代金一分拂、醬油一樽七匁、酒一升に付二匁、四升代、合金一分也、四十文明樽代、久上より請取、出、二朱久上にて兩がへ、八百七十二文來ル、三日切持來り小遣一文なし、此八百七十二文と明樽代四十文、四日より小遣錢也……

四ツ過一猪口冷酒呑、麥ゑましをすまし吸物にして、香の物にて呑。休。」

金錢の出入は實に精細に記してある、小遣の如きも最少限に切りつめてある、寢酒の肴も麥ゑましの吸物と漬物だけである。老泉は併し酒が非常に好きであつた、毎日晩酌はかゝさない、時としては晝にも呑む、それも量は左程多くはない。又肴も極めて粗末なもので滿足した、酒に關する記事と、食物や料理や酒の下物の事は殆んど毎日の日記に見出される。

「九月七日懐靖(快晴)

入谷大木氏より貰とうしやう(泥鰌)汁に煮、牛蒡十二文、酒十二文。白山金次郎來、酒一升呑合、新助夫婦同席、本店より新豆あわ雪七ツ來、あんかけにして酒の下物ト也。水代五文」

此頃は淺草は飲料水を買つてゐたと見えて、老泉も毎日水代五文を拂つてゐる。

「九月廿三日(上略)

仙臺貧人來、二朱合力ス、但シ七書・詩經、無點書入本、唐詩礎、替リニ取（下略）」

「十月一日（上略）

奥州醫生より草わい（鞋）一足、初穗心か錢十二文、手紙一通、竹塚出ニテ、三谷仁（山谷の人）取次ニテ屆遍鄙ノ仁其志厚、此方ノ眼力不レ逢、七書・詩經・唐詩礎、但シ九月廿三日ノ本人也（下略）」

是は老泉の義俠心を見るべき逸話である、平素は極端の儉約をしても、斯樣の窮生に逢へば、二朱の金を惜氣もなく合力してやつたのである。尤も些少の本は取つてはゐるが。

七

老泉は當時の學者から愛せられた事は上記の通りであるが、加古川遜齋にも最負になつたものと見えて、次の樣な記事がある。

「九月十一日（上略）

加古川先生一周忌、心光寺へ墓參に行、布施二百文遣

加古川先生葬面見事に出來（下略）」

とある、加古川遜齋は名周三、字周藏、麗川又遜齋と號す、播磨人、堀川學を奉ず、江戸小石川に來り帷を下して徒を敎ふ、性恬澹寡欲、他の嗜好なく唯典籍を好む、珍書を藏する者あるを聞けば、千里を遠しとせずして之を訪ひ閲覽を需む、家甚だ貧なれども毫も之を患へず、文化十四年九月十一日歿す、年七十一、白山心光寺に葬る。

右の樣な人物であつたから、老泉は特に生前愛顧を受けたので、其一周忌に方り、墓參もし讀經もしたのである。又其の石碑を建てる事に就ても盡力したものと見える、十一月十八日には、横田順藏といふ人から「加古川先生碑文打本頂戴」と日記に記してある。

老泉は屋代弘賢にも愛されて、其の屋敷へも常に出入して居た、日記に

「十一月十九日

（上略）晩方屋代小太郎樣死去に付、くやみに行。

十一月二十日

朝七ツ半時より、屋代氏葬禮に行、白山下り口 空白

寺（妙清寺を忘れたのである）四ツ前歸宅（下略）

十一月廿四日（上略）九ツ時より屋代樣へ本店亭主同伴にて行、小太郎君初七、非時、膳部本膳、本飯汁、つまみ豆腐、小かぶ、坪白味噌きくらげ計、辛あゐ大根ころ柿あい物、猪口にんじん細ひき、豪引さつまいも、大油揚ト豆腐へ、味かん中へ入寄物二切、御酒引盃三はい頂戴、硯ぶた百合鹽打、干海苔揚物、辛物蓮根薄切、生ぶ、御吸物鹽松たけ防風、かふノ物、膳部平田ぜり丸ぶ大松たけ長いも大くわへ、御茶出、茶くわし、まんぢう三、今坂二。あい客なし、此方兩人御豪所にて頂戴致候、膳部相濟、御書齋にて（弘賢と）しばらく御咄申上候。」

小太郎は弘賢の嗣子で、弘賢に先つて歿したのである。

此の頃の士人の家の法事料理の献立が、老泉の細記に依て明瞭に分るのも有り難いと思ふ。

八

「堂前隱宅記」から、まだ抄出すれば色々ある、十月十七日の江戸の大火の事や、本屋組合の年番割當の事や、珍本に遭逢して貪り觀た事や、近藤重藏の宅へ行つた事や、重藏の子息が訪ねて來た事や、家族の一人が嫁に行つた事や、樣々書きたい事もあるが、餘り瑣細な事で煩しいと思ふから省略した。

併し上に抄出し、記述しただけでも、松澤老泉といふ人物の影は、薄ボンヤリと現はされたと考へる、私は是で滿足して筆を閣く。

（昭和十、十、十五艸）

（追錄）

前文を草した後で文行君から、松澤老泉に關する資料を與へられた。それは次の三種であるが、先づ原文其儘を載せて、聊か解說を試みる事としよう。

一　老泉大人小傳

是は老泉の子萬之助が、天保十亥年八月に記したもの、淺倉屋吉田氏の藏本をかりて、文行君が寫したとある。

「松澤氏通稱は和泉屋庄次郎、家號慶元堂自號成楊、一號老泉、江戸人、神田佐久間町に生、ヒトヽナリ父

母ニ孝行、兄弟妹ヲ愛シ、夫婦睦シク、子三人ヲ生ム一男萬之助、二女ちか、三女きくヲモヲケ、きく五歳ノ春三月廿日世ヲ去ル、時は享和三亥年也、老泉は明和六己丑年出生、後五十四歳に至る迄、七度類焼に遭ひ、或は出水にカヽリ、千變萬化の働ヲイタサレ、家ヲ盛ニイタサレ、諸名家の御ヒイキにアヅカリ、兩度京攝ニモ登リ、朋友に信交り、仲ケ間中ヲ世ワヲヤカレ、秋太・勝村・植村ナド、如レ神ニヲモイ、親父と申クライの人ナリ、臣家平吉・庄兵衞・金右衞門三人の賢臣アリ、老泉一代の盛事、大先生の如し、嗚呼哀哉文政五壬午年三月十三日逝去。一男萬之助字篤光書。天保十亥八月。」

なるべく原文の通りに掲げた、嗣子の書いたのであるから、信用するに足りる「老泉一代の盛事大先生の如し」とは、事實であつたらうと思ふ。

二　賣麥翁畫賛（作者・月日等不明）

「這箇老爺、六十八年、機絶仁義、用離定　十八後、果爾歸眞、幸有孝子、竈烟氛氳。五十一歳、遁世落髪、賣麥自號麥鬼居士、法仁榮境、其浮屠名、予或日問祖父由來、答泉州產、獨來江左、竹綿爲業、母有賢行、敎以儒典、兄弟三人、共成書肆、爺第二產、生涯設子六男三女、一男云德、有一女子、二男云仙、現續泉庄、慶元主人、一男二女設了妻死、三男云八、家業不同、設五子也、四男出家、現住本所光藏仁祠、五男出胎未幾已亡、六女幼歳、爺被愛逝、八女已嫁、子有二男、九女在聟、一男一女、同父業」

是は老泉の畫像の賛であらうが、多少誤字脫字等があるらしく、意味の通じ難い所もある、併し、老泉の父庄八が泉州から江戸へ出て來て、最初は竹細工を業とした事や、老泉の母の賢母であつた事や、兄弟三人あつて、三人共に本屋であつた事や、老泉は二男であるから本家では無い事や、老泉には澤山の子があつた事や、二男が泉庄の家を嗣いだ事などが分る、多分是は事實に據つて記したものであらう、上記の萬之助の書いた「子三人」といふのと衝突するが、此の　つ方が正しいのではある

四「煙」と云ふ煙草を作る人は、真味を考へて作物を作る者をいふ。

日本のセントヘレナと言はるる薩南の沖永良部島は大西郷が流された所で、ここが煙草の産地で、北海道の北島と心ゆる煙草を大いに吹かしたものである。北島と心ゆる煙草は、「国」と云ふ名の煙草であるが、彼が金銭を通ずる行ふ所は二十銭バットが十銭位、それ以下かつてある。香気高の煙草は、阿蘇山と煙草の天才がありとする。

二度目の阿蘇登山には、八月末の大風雨に降りこめられて、内牧温泉の阿蘇ホテルに四五日滞在した。ホテルのスターといはれる女給に山内今朝子といふのがゐて、レコードそのもののような何でもうまく唄ふ極めて朗らかな明かるい顔の持主で、阿蘇大明神の祖神健磐龍命の神話に名高い的石村の生れだ。これは林辯護士以上の早熟で、三歳の幼時からの愛煙家で、二十を越したばかりの若さに、喫煙生活、既に二十年、専賣局から表彰さるべき經歴をもつてゐる。キャラメルを欲しがる幼けなさの頃に、菓子では啼き止めない。タバコをやると啼き止めるといふので、夙に村では、「不思議な愛煙家」として知られてゐた、幼少からの喫煙者は顔色が蒼いといふが此人はそうではない。今ではバットが一番うまいと言つてゐる。タバコの天才といふのは、こういふ人々をいふべきであろう。

○

○南方北方の文化は朝鮮經由で日本に来たものが多いが、煙草だけは日本から朝鮮に傳へたと云ふ、外国との海の交通から北の品は日本へ来たものである。

○日本の刻み煙草は世界の刻み方の細微細工を誇ひあることを以て世界の越絶したることの味のよしあしを別として、世界の煙草の交

[illegible]

最後に主なる國で一番澤山賞れて居る煙草は、例へば日本のバットのやうなものは、先程喜多さんからお話があつたやうに思ひますが、この日本のバットに比較して、同樣な大衆煙草は何處の國も非常に高いのであります。日本のバットは、一本七厘でありますが、米國のテンセンシガー等と云ふのは、一番安い煙草であるが、それでも一本一錢五厘以上である。最も澤山賞れて居ります十五セントのラッキーストライク等は二錢以上であり、そういふやうに、日本の金に直しますと、英米は三倍乃至四倍、ドイツは七倍、イタリー、フランスは同樣七、八倍と云ふことになつて居ります。結局、最も値段の安い滿足を得る手頃な煙草と云へば、日本のバットが一番良いと云ふことになると思ひます。

[illegible]

同町の宮阪廣助――鶏肉商の今廣からは、ソップを賣り出した仁で、鶏肉も食べさせてゐたが、ソップを盛んに滋養飲物と唱へて、各戸へ配達をしてゐた、其の方では元祖人である、この今廣のシャモヤへは、場所柄とてお客が雜踏だものである、しかし主人の宮廣は、東京府知事を相手取つて明治十八年以來二十二年に亘つて、訴訟沙汰（酒稅問題）に身代が疲れたものと見え、後に段々影の薄くなつたのを識つてゐる（ソップを東京府は酒だといつて告發した、尤も今廣の廣告に、ケレー、ソップ酒といつて宣傳したからである）ソップが酒といふのも珍訴訟であつた。ア

△明治珍訴訟ソップ酒

銀座で明治初期（二十年前後）に、新工夫新發明の連中は肩々相摩すといつたほど、多くあつたが、ツイ先頃、銀座から家號を亡くした恵び屋（足袋店）の主人（先代であらう）と、今廣の宮阪廣吉は、いろ〳〵計畫的であつた。

前述のソップ酒の問題の廣吉に就て、其廣告を一覽に供するが、ソップを酒として賣弘めんとした策略が、東京府の酒稅を課した理由で、急所を突かれた譯であるが、策士は酒といふので賣當てんとしたのを、ドッコイ酒なら稅を納めろと、狙ひ撃をされた譯である。

ソップが酒であるから、酒稅取立るといはれ、泡を喰つて東京府知事を相手に、數年間訴訟した、其廣吉は左揚の如くで、これは一寸問題になりさうだが、寧ろ明治珍訴訟の一つで、裁判所が「酒と廣告してゐるから酒だ」と、東京府を勝訴にし、又一方「ソップは酒に非ず」と、今廣に團扇を揚げた裁判官もあつた。

のまゝ人もさいさんと言ふことが、合物のすあしを言ふ時に、えの料理味噌であると言ふて、味を殺さぬ時を言ふ、料理と言ふものは味を殺すの法であると言ふは、素材はやうでもあるが、実は合物を大切なのは其持味也あつて、料理の為めに其を失ふことがまゝあるを、料理が複雑で念を入れ心入れると其持味は全く失はれて、料理人が油理の為め用ひる香料や其他の味が勝つてくる、つまり料理は味を深くする術也あるが、日時に合ふものウブ性を奪ふものもあれば得る、其のウブ性を失はずまゝ料理するのが板前の長技であるが其の容易得られぬ料理者と何の原料を活かして、其を油理

する油理しまへば、何なりとも出来ますと料理人の技能を特に入るかれ思ふたが、やはりいのん要らさらん加工をやることが有るのもこの料理味が加いつて、味を減ずるものあれば、料理味がどうまんが一番甘く食らくることと塩を駄して其の食らのが一番うまい之んを表つまり少量の塩を入れ所謂うしろとするのが最もうまひおちこんあり油理の油理いろへが料理人に教へる前迄であると言ふて満足ものこんないろ〳〵工夫をかくると、其の外けまるく〳〵

凡そ飲食の物で、料理人の複雑な工程を経ぬものは無しと言ふことのあるも悪趣味あるものしき者無を

まつ、日頃いろを軟かくし、清原の過きる味を淡泊
することを主とする料理人の工程を待ちかねて、適合の品
のみを料理にとりかへることもあるが、前菜の
題目などは、それの実は料理にとり、面倒に安く
ぬのである。自分などの細かの時から菓子などを食
もぬもとをとると大福餅などいろいろある
が、実は菓子屋で作る上等のがまづいもつて餅
屋で作るのは二流の方がうまい。これも是非菓子
屋にたのまうぶる味があるからである。鳥や牛
肉などの調理は、料理屋が甚だ巧みで作るのはうま
くもなく、銀で拵へて誂へたものがうまいこと
んは拙く口にもてやうに自分から拵へて、日本の可

減をはぶくばかり、色味を出すに苦心
なか料理することを所々に味もあるのであるが、森の
料理いろを越すものは無い。また煮菜とあるが
素人料理家庭料理で料理の範囲を出ることは
ないが、其の大まかに粗ら所々一種掬すべき味がある
洗錬と仕ての所々に原味が保存されたのを割べんと
うきの。其の日々保り返しに合つても飽うるのは此
故である。年寄りの実の想菓味の方が
ることは此が、折詰のやうな数のまはいあるとも
料理屋が作るのは料理味とする、年寄も料理
屋に注文すると料理屋味とする。自分も或る時十
数の間四時場の長に前岸の板まかり二合を

取つて食つたことがあるが、其の料理味は解剖したことがある。

日光原産鮭金とゝあるを催し、鮭や鱒の種を心ある方法としてあるが、中に真面目こゝに穏の如き重要なる件を浮ぶのもあるが、文人連が酒次跡を辿る事度近として速記するゝ様くらいやうなのもあるが、兎角談話が偶然と隨ちるい

と淡白の興味を惹かるゝ。酒人際といことまで公刊するせうれるとも。

西洋のプロステチニートを買つれある洋の時りが西洋の腸掛が拙くてあるのだうつ話を概ね建房る腸をおろすと、日的と指子が熟露

して上から女の腰が降つてくるとあるが、西洋のプは一丈を身に着けず全裸体で、あと腰を口ずゝ、光るうミ々丈々美人で選に市ゝと敷ふかのやうに思つたが其内一人が選に市ると、他の七人日一七嬢如氣味小生氣体ゝ丈るく淡泊ゝ

ツくと退出すると、あるが職業柄アッサリしたあで、日本人ゝ何とゝ拘足ら心地がすると云あおまけに、肥満して男子ゝ二倍もゝやゝなゝ女が一丈を纏のず橋直すと色氣も大半消滅すると云ふあるプロは閉店入つてあるいくらが生と拘れるの例で、徒尚ゝを拘の拘ゝ

とゝゝと云ふ北熙い日本のプロを較べると淡泊

ひとあり大膳ひとあり、遠寒今解すると、北しいものを要求する、新鮮な名流のひとりの外套を欲しいと思つてくんろ呼氣で溶ける日本でいくら持文が番ひもをんろ霞骨なことをしろへ、北點のろと習俗が甚だ異つてゐる日、彼等い霞骨とあることを道徳と考へ、日本の如く遠寒まるのを汚つて却つて不道徳と心得てゐる。西洋人は北點ろろと平立で寒氣ひろ。日本の仕折ろの角の曲折がある、例へば西洋でおを人を賜ろろ其物をろめをやーしてやるか、日本ひのつまらんろのひからと御遠まして賜る、つまらんろのと思ふろろ人ろ賜ろ一のろろやうひろるかいまころ曲折があるひとあり

日本の寒人はおを受ろるとおまけとろあとおを追加するとんひ西洋ろろいことひが何をろろ寒嬉かあつて、寒かろい心持とろろ、行ひなひ時ひろるが、日本の習俗ろの金蓋があるが西洋のひろと霞骨ひ寒氣ひがあろ。

○紀伊山僧上寺の行誠上人は近代の名僧ひ自分ひ家素素都を作ひろ、二三の前和尚ひ数年中辻衣で紀僧の文集を購ひて送ひ又ひ漢詩ひ作山ひ上ひ山ひ上ひろが僧ひてゐる。常つて京時西風が北人の歌を云て盛服し文人を云ろ京都ろ行ふ所泉山と緑山ひ少也ひ、京都ろ寿松ひろ、ヤット京ろ通つたことが行誠自身ろ

塚りおめしき法」とも好さんとなり。

成とりの秋の彼山庵に、おのを忠敬、高野に風、伊勢参宮

羅漢供の夜縁のついで、客舎の土休の池をえて仮くう

ぬ、西行ぬしハ、五十ばかりもうりぬ、神歌和の

上ばかりも、祐命ぬしおとゝ高野者の人うゝ、其日高

しかりくく、先年宮中うゝ杉宮の大輔とゝ高野先生

ゝ歌七首をみやうん、是ハ天説る入んもうきばかりの歌

うゝやと別のんうん、先生見ておとろき名いうめ後と

こ人ハ俗尼の歌ゝ、ゝ人、かうゝ

人傑うゝと云りめしれ、杉氏も其鎧宝を賞ゝ又れ

り、さて高野先生上人れ参いんことを話いれ縁山

と泉山の僧上寺を縁山と泉山と云ふ寺を泉山と云ふ寺を泉涌寺を京都泉涌寺

をれづ解うん好。さハ大輔がこと心れ縁山法師うゝ

ハーと、先生ハ京都の泉涌寺うゝと思ひとりも上

京ゝうゝべき時うん、ハ中ゝ其法師ゝ其ハ心ゝ思

ひとゝ、京都ゝ行くとゝ縁山ゝ都と法師ゝ脱ぬ

の歌ゝ人ゝ、其人ゝ造めべし、泉涌寺ゝ云

へば尋解ゝーらゝ尼時定天といふ歌ゝ

いはんーれ、定天ゝう人いきかれといあ、ゝ小りの人を

ーらゝハ其方れうの志のうゝきうう、ゝ高ゝ

我ーらゝといあこゝもあるまいといはんーれ、尼時我

尋四んゝーのず、泉涌寺のゝ歌ゝ、ゝ

ゝうゝゝ、一枝の短冊を持てこれ似ゝくゝもの

ゝうゝきゝ定天ゝを志ゝりちゝんうゝ。其時高杉連城

来あひてけるに、其流を汲める生中六さえ心ろに、其流
佛の惟豆寺の僧ろうとといひしが、先生大き驚き定
天のまろこびて先生の徳志うすきろう、我西京のあくべ
かろしまかくる人をしらぬといふことはなしといひて大に笑
ひしとぞ

かくかなし時先生つよく思へ心民の油と云歌を見しら
久しく逢ひまいらせんと思ふ、暮れ方に見せけんる所に
ろくろぶし、思ひんよ人の歌巻の火をも歌を時なま
ひし所なるべし、近きんうか心きこゆ屋し

上人の歌巻のかを歌を得ようとあが寄つてみるるに、歌
ろ高数にへるるもろ宗教ろと歌ろ入ろうるろ、上人のぬ
きいふ教歌巻にぬひ他人の歌巻を得ろ所がある。

其の雅業を慕ひて、やうやく集まる、小舟ろ接続ろ如く全中
一二番坊の邊りまで舟続へり特ろもろる流ろ義ろ
ろ事実を知つた。一時に多人と見作りなんと幸ろ
故郷ろんとろ、其時の心配に「浅瀬得し事をうんしと
思ひしまぶかろ、ろぬさとりうろいろ

詩歌二三を物す

陸羽青像

淡雪清味源陸羽　珠公利氏青軽烟　茶達霊酒牛
美客、紡鎖風炉興厳泉

本厳屋上所產　新茶経、飲啄荒園
下邸中秋有白鴻三度
之間、顧視對舞、馴如家鶏、点海軟仏最一の
奇也乃此三絶

羽衣浦似雲、高松微仙閣、却怪沖天鶴、収海芦荻間

閑夫離山鷺、近支路島居年、豈代芦荻裡、出墨在老樹

池辺春鶴、相対立多時、恃比林和靖、顧如梅馬海

叩くべき横の板にもすきこの尾ハ白玉ちくん音のさびしさ

なかの野へあすハ山迄と浦宮の行へも云ふ旅ハかな

海の上ほのぼのしあけ方のとふ山の遠くも我ハきつるかな

紫人もつりする あまも海山も見えぬをのみ見るたびに

見えさる旅の涙の袖ハ人をしのぶいとゝかりけり

岩枕さすぶ日かずもおもと宿ハかきりなきまぶ秋ハ来ぬ

枕に風ふく

しくゝゆゝ暁かけのかたぶきぬくのなごりなるらん

古寺のふるし昔を思ふる秋ハおつる雁のかつめ

右の歌ども上人の旅ゆかりの事ども載せ

人と共の大雲を指ゆく

松近浦ハはるゝ光のの人ゝ 長崎の遊びて廣言を

雲の比しとて、人ゝ ふ濱 ゝ廣言を敷く

ゝ、書一冊ともの一冊ももたさりき、清狂をハ

おほうゝ暗池ゝしとゝ山宮を氏共人ゝ

をきゝ、机きゝ水用の硯をかん 毛尾ハき

けゝしかゝ机一つもたゞ飯櫃と用机と名つけ

て共上ゝて書を敷くゝ 書きゝ多ゝ風に

じちゝ困いて、壁のひい入ゝ多ゝをかし 或

冬、難といゝくゝ魚をゝ人のもとゝゝおこせけゝん、と

んを焼べき庭下、きゝないもゝけん、柱ひかけ

いまゝうて、やがて腰刀をぬきて、きりてくれけるとぞ、まゝしらるゝとぞ出来しうや、軍兵を釜の中へ入れて焼かせけることもあり、殊に酒好きにて、いかなることもあれ酒にかくるゝ、因幡の吉谷りて世法人とこそ、俸禄をあづかりて、入用のことにて酒のぶいて、紙に酒一合と書きて世法人のもとへ出だし、一合に代りおこせ、又つかく徳利と袴のたれ、かれ買ひもてかくる、こんなる迷らぬ時は「又一合」と三度をあきてやる、かくすることはなりけり、云々

牛込高成の神の社に寺門野馬掛みの碑あり、別当の住持にてしとぞ、慕の侍面沈中多人沈る者、奈に蓋と、生涯を仕中まえてしへ人なり、

山崎道家の俗士太田才助如かりし時、度々の来訪ありひしとて、楚々を携れり、楚々こそ

今古文抄、惟酒是夜、花と花と　酔中花中

○無分数業に出れ者庶の前に立ち訴利者を賜ふ人としても何を買ふべきやの意を述べ出すに実八集書を賜ふ目的で者庶と称ひたりかの意ふのもあれ、の意の名称の者者小者者の名称山に生てゐるけれども、えを賜の気あるあるの物を名称の意が高くとも自分の仮味に接ひ、ふへ、そこで何を賜ふかと云ふ、と、自分の知る人の著書書を元の前に見て附して遂に云を買つてくる、著者者と雖書はかくと云ふ

も必ず知らしむ其の後ち所が自分の後を回顧する時分
もあるが、愛読者の人の心打の略々分つて
あるので、其書を読むと自分が知つてゐることが引合に出てゐる
ことがあるが、自分が記憶を得すして書きたることが其
書の自由に別の形となりて表の収穫
あるので、いつも其人と交方振り後話を交へるやう
な心持で、時々てくる、世間の後者もおのづから
著者の名聞が出てくるのへ、敢て著者を知
らずとも、偶と其人のことを後人知るのが機縁となる
つて其人の著書を求め後む人があるかも知れぬ
極論とでも著者の人の著書に限つて必後する人

もあるが、文場の初日方の新しみから来ることが
多いやうである。

三宅雪嶺の「二日一言」と云ふ隨筆を後人に見せ
四五年雪嶺の文を後きそめたが、大分面白が
うまくなる、行文が軟らかきに、相変らず
肉一點張りだがそれを嘉してきた。美濃部問題
起を幸として面白く武田を撃き出して美
濃部の死活の後を問後する人がなかつたと
して只向きもしないい軽蔑さを皮肉つてゐる文
るのは著者の性格さを表はすもの
の著者は此の書を試し中著と云ふ
文印を使用せる（四五一千五百年度印七号）の印を中著

とせこそあれ、中着の華美なるのうらうらと根付
ど帯にあめるこの也、其一の心動で帯に輝む
根付のもの、うしと思のよりは低で、いつ！！う失
つたのを家と吟つ口て漸やく気が付いたが名
何もしやらかもの、金銭授受のあいてもいあ
るが自分不自由のこと、自分の実印もろくろく命の去
きまもとうに消えるの年の比野田の板に必ず比同
もちいのうち、其れ今の大江を家つ父が印刻に
上手と云い人とれたれ仕くとれたかた去
い間のこと印で世名を国に輪廓と雪輪のあ
るとの印鑑の表面也、夢つて名のことも考えて実
印としても通りまらいれ印と故味ありとあり記事

印は雅印の寸法で実に良いものもいの
印を用いとあるのを心配しと思ひあと
まあるとれ、七十七歳を印ある前日自分を彫しもつ
れのの何れかあらうて、改を印の変ちしと思ふ名ちの
十四年隠居のこと思くの愛情の人ちきを得
ちい。（十二月八日の記）
のことも無事こと、老の人とも、自分い例と信り日後の
赤尾に一年の起）世福寺を書いたが、表紙が記事
の多きを感ずい。自分いあのとこのが名ちい今
氏表位ある仕方
ゑ、美に拘らず可ちゑ表化あつた。大体法分の
需ちゑ悦り過筆心の下紙のこと書こう忙かしかつた。

本年の初めに坪内逍遥の發行になる余の先後大なるシモツクであつた逍遥を慕ふ人が所々に就こいろ〳〵のことを書くことを托せられた。先づ手初めに雑誌に投寄したものが少からずあつた。先芽を漏めて一冊の随筆としたいと考へあつて、文墨の涙と云ふ随筆を編むに相当ひまをつぶし、跋も随筆、岸稿の出版を待いんで、首稿いま七分前年書いてあつたけれども二三分を補刪するに過ぎない。夏を入れて書物屋社から余の随筆を出さんとの話を受け、英語の原稿を毎日毎日の日課として書いたり、煙草を随筆と名づけたり、

原制

も本年出版出来るこゝ云ふのが別段問ふ分りまして、汗年上刊とする。右此等の諸十数年前早稲田の出版部を出したる養老一夕話（二冊）を改版すると稿墨の為から記まれたのを、一部を刪除した出版を試したが美い年末に刊行されたが。赤穂文社から余が既刊随筆中特に日本及日本人に関する記事を集めて一冊の随筆を出版せんとの交渉出で、其書と任じ春風閑話と云ふ題名にすることに決まつた。十月以来の全部校了とすつかりもう出来あつたが、今年四月から余の随筆、教育界を特別不杯の出版と合て

ばかりのとき、なんぞ諸の仕事をなすべきものあらば、この間、
とうもろこし、麦、蕎麦、前本年は隠業二冊を出版し
改訂再一部を出すべきものなれば、有閑人なれば
仕事があつた。
自分は此年（九年）は諸印刷の託をも受け、金が
扶持離れをして、借金を返済二万五千円となる
計をなして、なるべくことなくこれへ他と差
手の収入があるとても出費部は不況で財政
益々困難に陥り、雑い無駄あるも、借金の
収入は我の年金とふるも、なるべくあるべき
自分の経済の無関心で、今まで月々の定額入
でやつてゐたこゝろ、約四千円を一ヶ月の預

金月計を差すことも多く無つたが、今年
八月から、南京預金をとり毎月五円を引出
すことにしたが、この基礎不堅んのまゝで、預金が
月の進ちる中途で減退することを考へると甚
寒心がよくない。昨年の例として年末の預金
額を報告し来るべき例として、此が、借金五百円計
りの原を報告し来たので、心細く感じた。実は
年の一月と一月間の金を預けたる残額が斯
くの如くなるべき此の残額で微する自分の月
計は八百円を要する基金となるが、実は預金
の分の株の配当から計二百円、前の振の年金分千二
百円外に振込入四百円、此の年金三千円を差

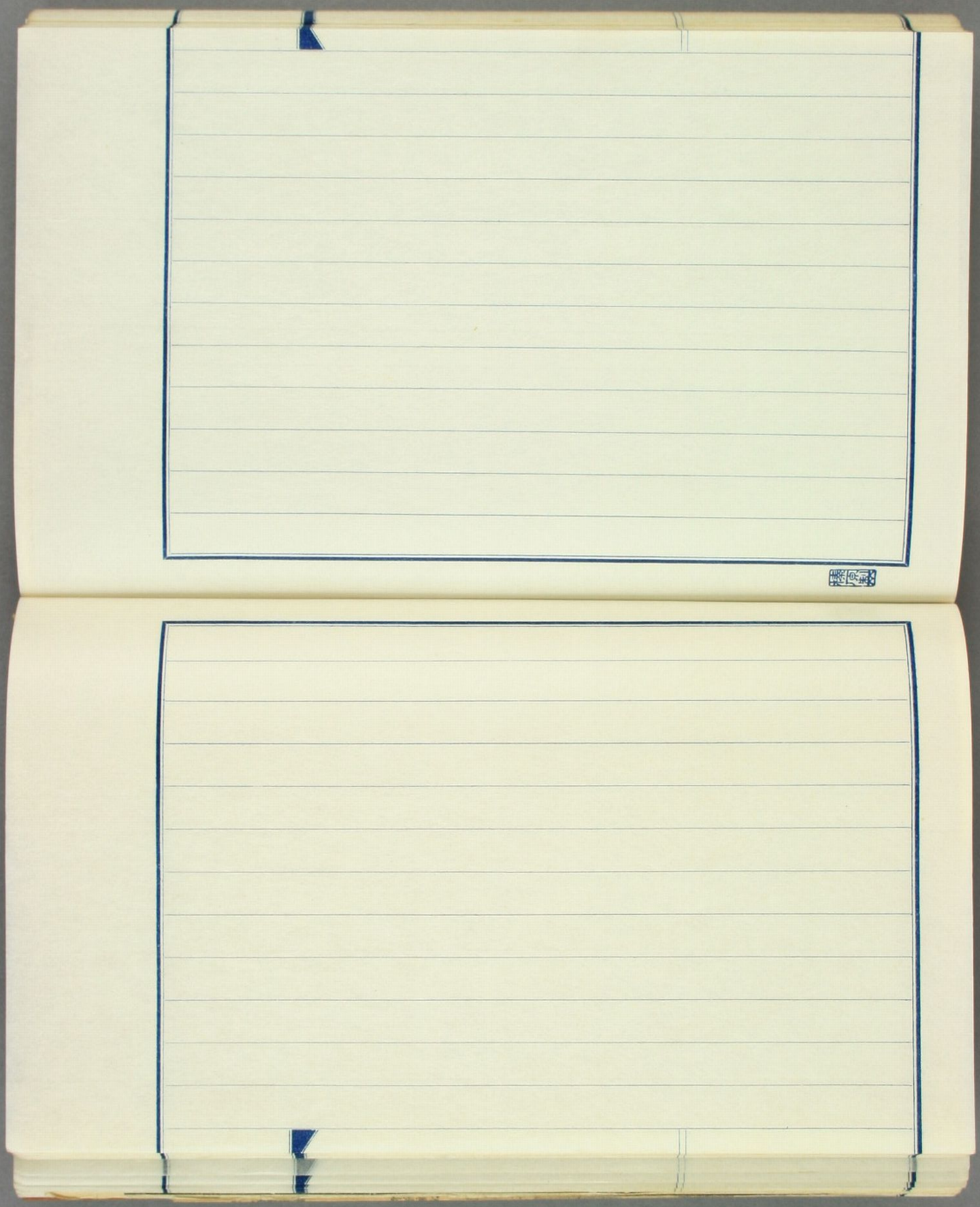
まると月計八千円以上となる。即ち扶持離れの
貞公は、なるべく数万円の蓄えをしてゐることも
のべたる。
貞公は一時相当の負債のあったこともあったがどうにか
まんが片つきかけるに十年ばかりは借金は全く無
くなったが、唯だ[illegible]姪[illegible]終[illegible]念願にかかることのみは果
されの[illegible]三万円の借財のあることだけ。これは文政
出現の事業を[illegible]借り入れたものだ。うつかり
個人借財の利を押しだのだ、貞公の責任は免れ
ないけれども、貞公の為に負債すべき
でもなく、赤字補填に悩へもしまへ。本年北の負債
の内一万円は先祖扶持を返済することが出来れ

のだ、これを機会として文政期分の内先祖扶持の分を大凡完
と支払し、貞公は一[illegible]万円を先祖扶持に支出する
残金二万円の借金は今年に於て仕拂うて仕
まひたいと、漸々貞公の手元を得て一万円を
印刷所に支拂ふ。なるべく金の出から拂う
ことにしたが、ここに漸々身後の家を如何すべき其他
を考へ得た。其代り日生活費を充へべき一万円
を残した。
ここに貞公の任務は特記を要するのは、二万円
ほどの義捐を[illegible]ことである。貞公の
生活を維持する為めに北海道を[illegible]したが、自
分の死後[illegible]義捐のものが二束三文で売方、数

私事の如き残念と感じ、ちい間同書に興味を覚つ
た安田椎園が古文書を蒐集してゐるか
ら、見せて呉れと云つて或る程の所書を買つてもら
つた。買い代金は二百円。花田書の買値として或を
得たものと思はれる。計値の同書は古
任数、古文書数、名家書簡、名家自筆
写本の四数と書書部数、版本の或部数とで
代価を覚えず千五百円。
脳尾と刊り文の
書こ引文をも比べ、花書の残部代価三千円
帝山房の紹介で東海日記代五百
円を併せて一万六千円が収獲である。尚は余
の原稿料若書印税からも入しるこの千五百円

はかりをこゝに記して置く
毎年日記の終尾と一年間の編集のを書くのが
例となつてゐるので、ことしも其例に倣つてみる。
上は本年身辺の変ることを知するのみ。きて
い、陽て来年は如何すべきかあらうか。お入考
薬が多くなるのは利産一身数山記の年なる
を免れんとい、武の素寿と一緒として自重と
倣つて一身形歳を数山記するのがし
ばらく測り知られないことは如何いろ
数山記と云ふ面倒のものが深山幸ひ人手も
なく好産の墓も無くなる。答為ひなき。

昭和十年陰暦記



以下
9丁
白紙

丙子老録（一）

日本図書館協会
昭和十一年一月
鄭 義生

元日のうらゝかの朝富士山を望むと戴白の山顛が青宵を凌ぎ、屹然立つてゐるさまは、常に倍して崇高の美を感ずる。日本の詩人は古來之れを形容するに苦心してゐるが、八朶の芙蓉だ、倒さに懸る白扇だなどゝ形容するに過ぎないので、甚だ慊きたらない感がある。西洋詩人は流石に見方が違つて、形容も斬新である、佛蘭西の哲人ポール・リシヤルは曾く世界を巡つて正義の國を求め、遂に日出る國日本にそれを得たと喜び、富士を讃して、宛がら合掌して天を拜する趣があると云ふたが、これは邦人が思ひ付かない形容である。如何にも兩肱を張つて掌を合せると圓錐形を爲すこと富嶽の如くである。此哲人が數へ擧げた世界に超逸する日本の七つの名譽は、建國以來一系の天皇を戴くことを始め、流血の跡なき宗教を有すること、嘗つて他國に隷屬せざること等で、皆な此の誇るべき山の合掌から齎らしたものであるかにも思はれて、富嶽の美を彌益々高く感ずる。

可否茶館

今はカヒイハウスは街頭到る處にあるがこれが最初出來たのは明治二十一年頃で、同年四月の郵便報知新聞に下谷黒門町の警察の隣に可否茶館が設けられたと出てゐる。此の可否茶店こそ珈琲店で、客は喫茶しつつ新聞を讀んだり碁將棋を弄したりした。卽ちこれが當時の小クラブであつたのだ。こゝに注意すべきは、當時既に珈琲の字があるのに、可否の二字を充てたのは漢學の餘波でもあるが、實は珈琲と云ふより目をよく現はしてゐるかに思はれる、多分此の館は當時社會雜多の人の集合所で、互ひに世話を交換し若說を可否したであらう。可否茶館と云ふのはなか〳〵よい思ひつきで、漢字應用當時の名としては上乘のものと思はれる、當時のカヒイハウスは、今のやうに女給に戲れる所では無かつた。

銅　脈

狂詩の天才、上方に銅脈あり、江戸に蜀山あり、自分は銅脈の詩を讀むごとに、其の諧謔の輕妙なる。どうしてこんな人が上方にあるかと怪しむ程江戸氣質であることを感じた。此人の狂詩で自分の好きなのは「鈴鹿多雲助、山中賭奕俳、輪來當(タヤビ)焚火、散成胡麻灰(ゴマハイ)」の一詩で、雲助の生活と宿驛の光景をコンナに甘く歌つたものは無い。此人は聖護院宮の諸太夫で畠中頼母と云ふ人だが、銅脈が通り名で本名など餘り知つてゐる人はない。銅脈の戲名も餘り詮索されたことがないが、古く獲物を銅脈と云ふた所から、狂詩の詩に似て詩でない、似而非の獲物であると洒落れた所に滑稽がある、恰かも汽車に乘るものが見へを張つて發する時と着する時のみ一等車に乘り、其中間は三等車で濟すのを烟管乘りと云ふと一般で、兩端は金銀でも中間は竹であるから矢張り銅脈と同じいことだ。

みさこ

「みさこ」を標題とした書物があり「みさこ」を屋號とする鮨屋がある。「みさこ」は鳥の名で、此鳥は海中の魚を捕つて嚙み碎き口中の唾で酸味を加へるので肉の腐敗を防ぎ、それを巖穴に貯藏するハビットがある。人間が動もすると此の貯肉を失敬することがあるが、その肉は鮨の如くおいしいと云はれてゐる。鮨屋に「みやこ」の屋號のある

由來も凡そ推し得るが、之を書物の標題とするのは諷刺の意味があつて更におもしろい。他人の調たものを吾物顔にそつと失敬した書物がどんなに多いことであらうか。

退筆の利用

昔しの文人墨客は其使用後の筆を埋めて筆塚を作つた。筆を粗略にしない文人の心掛けだと考へればなんでもないやうだが、實は自家宣傳の爲めにやつたものが多いことを思ふと愛想がつきる。市河米庵などは多くの名筆を集めて百筆譜を作つた位だから、その藏筆は夥しいものであつたらう。彼は不要の筆の爲め意匠を凝らし、之れを材料として圓形の火鉢を作つた。幾白大小の筆が火鉢の胴に應用され、筆の刻銘が自づから其裝飾ともなつた、米庵はは之れを坐右に置き玩賞したと云ふが、如何にもよい趣向で、敗殘の筆に執着する心意氣も寫され、筆塚などより俗離れした工風である、惜しいかな此火鉢は大震災に烏有となつたが、自分はその擧に倣ひ、退筆を以つて欄間を作らんとして折角蒐めてゐる。

紅白の鞠

瀧鶴臺の細君は非常に醜婦であつたと云ふが、容貌は醜でも其心は嬋麗で、良人が敬服するほどの良妻賢母であつたと云はれてゐる。此婦人はいつも左右の袂に紅白の手鞠を潜めてゐた。或る時それが良人の目に留まり、何んの爲にそんなものを袂に入れ置くと問はれ、妻の答に、自分のやうな不束ものは、氣をつけてゐても日に幾回かやり損ひ、他日再びせないやうにと、過つた時は紅い鞠に絲を卷きます、たまに滿足に思ふ事がありますと白の鞠に絲を卷きます、近頃はヤットやり損が少くなつたので白鞠が聊か太りましたと云ふたとあるが、之は珍らしい自修自制の思ひつきで善惡玉をレコードにした所が面白い。

雅邦の逸事

橋本雅邦は近代の巨匠で、其高潔の性格は種々傳ふべき逸事を遺してゐる、自分がいつか聽いて感心したのは、雅邦が最後の病床に就いた時である。知人が何か雅邦の病苦を慰める法がないかと評議した末、雅邦は長唄を聽く事が好きだから其道の名人を呼んで病牀に彈かせたらよからうと云ふので杵屋勘五郎を呼び榮藏等と共に訪はしめた處、病人は何故か今日は祢合が惡いと云ふて聽く事を辭した。其辭した譯は雅邦は平生藝術の貴むべきを口癖に云ふてゐるのに斯界の名人を病床に延き臥し乍ら聽くなどは如何にも無禮で平生自分の主張と相反すると考へ折角來たのを斷つたのだと分つた。此時雅邦は三十圓の金を杵屋に與へたが義理堅い勘五郎はどうあつても受取らないので、數次往復の面倒もあつたと云ふ。

ダツチ・ワイフ

熱帶地方に淩暑の具として工風された竹器がある。籠のやうなもので添寢の具である。西洋ではダツチ・ワイフの名があり、支那では竹夫人と云ふてゐる。此器は臺灣邊では現に作つてもゐるが、內地では日向の佐土原に製すると初めて聞へた。何にしろエロテックのものだから、いろ〳〵の傳說があり、詩人などは好題目として多くの作もあるが、元の謝宗可と云ふ人がよく此器を言ひあらはしてゐる。其詩を約めて云ふと、同衾の具ではあるが粉黛を羞ぢて胸次玲瓏である。敢て綺羅の衣裳を纏ふことなく亦雲雨三更の夢もない、靈心と忠節で溫柔に老いることなく、却つて六月氷霜の秋がある、此故に房を專らとすれども、敢て蛾眉の嫉妬を受けないと。如何さま此器は貞淑の夫人と比すべきである。偶々相馬御風氏より寄せられた、近著「道限りなし」を飜讀するに、最愛の細君を失つた御風氏に此器を寄せた人があると云ふ。それに對して氏は左の如く感想を書いてゐる。

このことによつて私には涙ぐましい、をかしさがついこみ上げて來たのである。正に笑へぬナンセンスと云ふべきであらう。

などゝ書き、愛兒にそれは何の爲めのものと問はれて、說明に困つたらしく、囁嚅として說き得ない所に苦悶が見へて同情に堪へない。

論に對して、大に愉快を感じたことであらう。かくて一記者は侯の重要な幕賓として遇せられてゐたのである。

大隈侯と薩派との關係は大久保利通以來のことで、とかく人材に乏しき薩派は絶えず侯の材幹を利用して長派に對抗せんとし、侯も亦竊に倚る所あらんとし、大久保の次には黒田清隆に結んだが、今度は更に松方正義公に結ばしめんとするのが、蘇峯氏等の策であつたらしい。明治二十九年松隈内閣成立の緣因は萌す所が一日でない。これ等の事は蘇峯自傳に詳細なことと思ふが、私は前記書翰に因みて一言するに止むる。

大石正巳伊勢の油屋へ壻入

養父は三十四五、壻は四十三、媒酌は尾崎行雄

伊勢の古市油屋の亭主白井清榮門と云ふは、當年卅四五の男盛り、又つた並妻おけいの君と申すは、まだ卅になやるならずのこれも女盛りの美人にて、子種なしとも限らぬに、此家に壻入ましますと云ふ花壻の大石正巳殿は、今年取つて四十三四の半白書生と承るぞいとも愛でたし。シテ其の下た仲媒人と云ふは、壻殿より年若かにましますと尾崎の朝臣行雄の君にて、上仲媒人はこれも壻殿と殆と同年輩の犬養の宿禰毅氏にして來一月吉日を下し壻入披露を兼ねて媒妁人同道伊勢の兩社の宮に詣で給ひ、千代八千代迄縁深かれと祈願あらするとなん承る、羨ましき事にこそ。〔明治二十九年十二月十七日東京日日〕

博士の發音法

學位令にある博士と言ふ文字の發音方は、從來唱へ來りたる如くハカセと讀む事と思ひの外、ハクシと發音する事になり居る由、今其の所以を尋ぬるに、博士といふ文字は我邦にて從來ハカセと讀み來りしも、是れは官名にて學位にあらず、其文字を學位に用ふるは今回が始にて、今日の博士は昔の博士と全く無關係なれば、其區別を明かにせん爲、斯くはハクシと讀むことなりと〔下略〕〔明治二十一年六月二十一日東京朝日より〕

私の見た維新前の洋學者達

今泉みね

私の目にうつつた柳川春三さんはとても面白い人で此の方がゐらつしやると家中笑ひこけてそのおもしろい事といつたら今も忘れません。第一容貌も一見人がふき出さずには居られないやうでした。一寸した手踊りなどお上手にされ、御酒の席ではあれお茶の時ではあれ御自分のお作りになつた小唄などに合はせて遊ばす時の手つきや御身振り、思ひ出しても目に見えるやうで、まあ餘程の即興詩人でゐらしたやうです。中でもおはこは、

わたしは
かさいのげんべほり
かつぱの伜でございます
わたしに
ご馳走なさるなら
お酒に、きうりに、尻玉ご

といつて二本指を鼻のところにあてて、引き込んでおしまひになる時の御樣子は誰だつて笑はずには居られません。又書の名人でゐらした事は、既に有名なとでせうが滿三歳の時の書が、お國元尾州の殿さまの所に殘つて居ますさうでして、それはなんでもお三つのとき、御前で何か澤山に書いて御覽に入れた際「もういやになつた」と遊戯もなく書いて居並ぶ人々をアッと驚かせたといふ程の方ですが、おちいさな時からそんな方であつたとは思へませぬ位磊

柳川春三の横顔

落で私など随分可愛がられたものでした。私が生れました時もそれはそれ[illegible]下すつて直ぐさま二葉の小松の繪に替へして、お歌と詩とを添へてお書き下されたといふものが茶がけの軸になつて、八十年後の今日なほ手許にございますが

「うら若きふたばの小松今よりそ
　千歳の色はかくれさりけり」

との假名文字は實にお見事だと誰方にも云はれます。その頃私の家には、いろんな方達が出入りされて居られました。家は代々蘭學を致して居りましたもので、凡そ洋學に志す人達はみんな集つてゐましていつも賑かでした。柳川春三、神田孝平、箕作秋坪、成島柳北、福澤諭吉、宇都宮三郎さん方のお顔は特によくおぼへてゐます。皆さんが代る〳〵私の遊び相手にもなつて下さることがありましたが、福澤さんのお脊中が一番厚くておんぶ心地がよいなどと申したものです。それから牡丹の花の咲いたお庭で大岩を眞中にして戯ごつこをしましたが、福澤さんは私をおをとび越えられたり、又割合にお近くだつたおうちへ私をおつれになつてお机の引出しからあちらのおみやを出して下すつて又おんぶで送つて頂いた事など、ハッキリと記憶してゐますが、其時の品がまだちやんと殘つて居りまして先年慶應での展覽會の折にもおだし致しました。成島さんは、お脊も高く殊にお顔の長い方でしたから何んとなくお馬の感じがしました。實際お馬の踊りを遊ばす時などよくお似合だと思つたとです。箕作さんは眞面目一方の方でお子樣方も勉强家、二人の息子さんが本を持つてお庭の木蔭に勉强に來られた事等も始終ございました。神田さんは、彼の乃武さんのお父樣で乃武さんとは私も遊んだ事があります そのお歌にこんなのがあつたのを空覺への樣に憶えて居りますが、

わか思立ちにしことはたた神
　成るも成らぬも空にまかせむ

宇都宮さんといへば化學を日本に始められた最初の方のお一人で、いつも皆樣の前で、いろんな實驗をし心であんまりお長いので、チョコチョコ覗きに行く、私は「お鐵の蓋のお話はもういや〳〵」なんて申して逃げた事もありました。さてその頃の皆樣のお身なりはとよく聞かれますが、それは極く〳〵お質素の樣でした。お召物もお袴も太地の手織もの宇都宮さんはいつも紬の大きな五つ紋を召して居られた事が眼の底に殘つてゐます。さうしてかう云ふ方達がめいめいもち〳〵のかくし藝等して、うちはよい遊び場所でもあつたやうでした。朝などあんまり大勢でおみおつけの實がなくなり「桂川の山吹汁」……みの一つだにたきそ悲しきは當時有名だつたさうです。又「あやめ、かきつばた」といつて其等の人達がそれぞれ御自分の似顔を書いた本がございましたが、いつか知ら失くなつてしまつた事は、如何にも殘念です。今見たらどんなに興味深くも亦皆樣をなつかしく偲べるかしれません。何せよ其當時はほんの子供の事で私には何もわかりませずたゞ皆樣がやつぱり子供のやうに遊んで居られたとしか思はれませぬで

別人？同人？
明治人物戸籍調べ（二）

黒田　清隆　黒田　了介
福羽　美靜　福羽文三郎
井上　毅　井上多久馬
成島柳北には
弘。保民。甲子太郎三種の名があるが、甲子太郎は通稱である。彼は柳原の北口に邸を構へてをつた。柳北の雅號もこゝから來たのである。

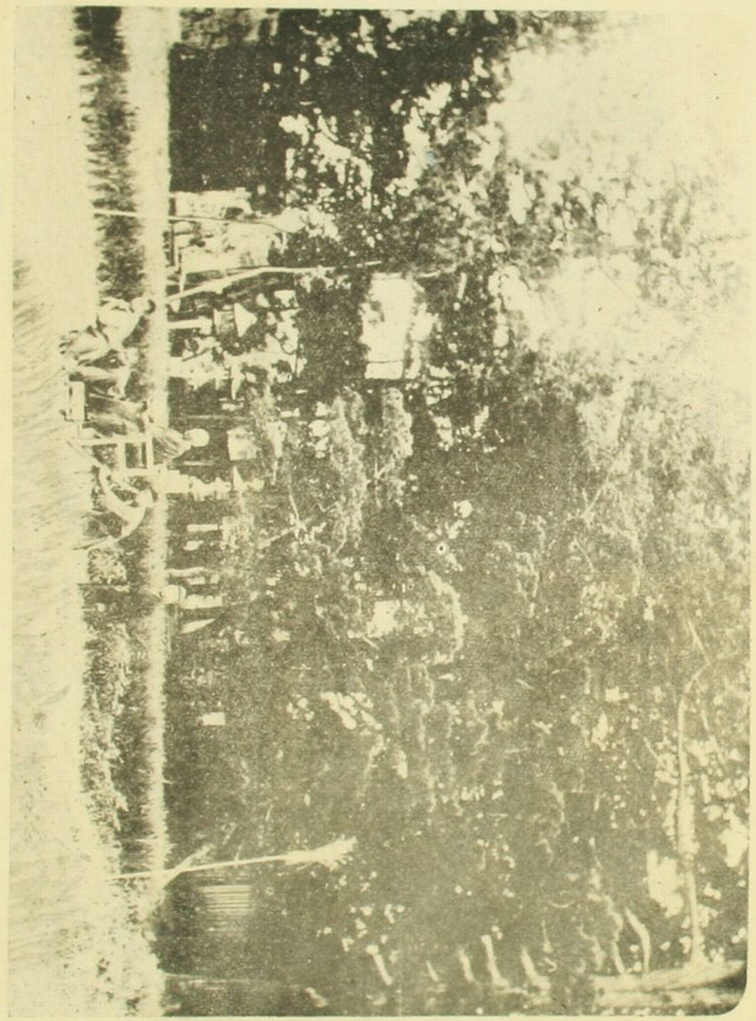
我が陸軍の父
大村益次郎
は通稱、名は永敏、村田藏六といふのはその前名である。
東京横濱毎日新聞の創設者で後の東京府會議長をつとめた
沼間守一の前名は　高梨儀次郎
後の元老院議官になつた
藤井希璞
神崎　少進

したが、時には眞面目に今云ふ各人の學理や研究の發表の樣な事もされ造物者とかゴッドとかいふ語もその頃から私は耳にしたものでございます。そして世間からは桂川の道樂坊主〳〵等といはれますのを幼心にも面白くなく憤慨したものでしたが全く今からしてみても、諸藩のかういふ人達…當代の名流、新學を以てきこゝた人達を集めて朔夕、一見遊び氣分にのみ浸つて居たかのやうに思はれたり見られたりしてゐたか知れませんが、其處には祖國の前途に見とほしがついてゐて次の時代に對する大いなる志も計畫も有り、必ずやその笑ひの裏には血と涙があつての事と此頃になつて肯きもされ、同時に意を强うする次第でございます。

條約改正に畏多くも
明治天皇の御軫念（2）

記者

本邦畫壇に有名であつた
菊池容齋は　河原武保　通稱量平
衆議院議長や司法大臣までつとめた
大東義徹は　幼名勘藏、後に中口大藏と呼んだ。
京都の帝室博物館長であつた
森本後凋も前名を　岡本初之助
と云つたが、かう姓名が異つては、何の角度から見ても同一人とは思はれない。
我が海軍の恩人で、攻玉社塾の創立者
近藤眞琴は　幼名を鉚之助
と云つたが、後誠一郎、つぎに芳隣と改め、最後に眞琴となつた。改名の方法として、字數を減じたのが往々有る。
西　周
の如きがこの例で、前名は周助その助を一字省いたのだが、世間には此の方が通つてゐる。然るに西はその以前再三名を改めてゐる。即ち時懋、次に魚人、後魯人。小字は經太郎、後に壽泉、髮を落ふるに及びて修亮と稱へ周助に改め、周になつて落ついたのである。



明治御新幸新潟縣巡行之節（明治十年）ノ光景ヲ示サレタル寫眞ナリ（大正元年十月撮影）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

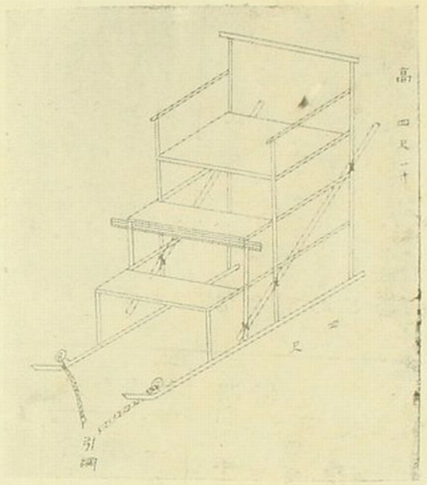
（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

（前列）（左）清水谷侍從（右）久我侍從（後列）（左）中島國村庄屋勝田市郎右衛門（右）同村戸長勝田市郎右衛門（中央）（左）（自）（至）（右）（自）（至）（右）

毛見橋の圖



紙後者の雜誌
高志路
ちとせ
四ちとせ

機を忘ずる

馬庾哉

勝海舟翁が年少時代、劍術の稽古をする爲め、幕府の御師範役某の處へ内弟子となつて行つてゐた。其の先生の所には猿を一疋飼つてゐたが、大變に怜悧の猿で、先生から劍術を教へて貰ひ、なか〳〵達者に竹刀を持つて立合ふ。新たに弟子入りに來た武士でもあると、先づ其の猿と立合せるのであるが、堂々たる人間が一疋の猿に勝つことが出來ない。先生からは猿を殺してもよいから遠慮なく打てといふ指圖であるが、どうも打つことが出來ない。他の劍術の道場では目錄を受けた程のものでも、此の猿には參つてしまふ。何れも殘念がること甚しいけれども、致し方が無い。

海舟翁も何度か此の猿と立合をやらせられたが、なか〳〵勝つことが出來ない。猿は小さな身をかはして此方の竹刀に飛上つて來たりなどして、どうしても打つことが出來ぬ。然るに或る時、翁は先生の御伴をして王子邊に居た或る禪宗の坊さんの所へ行つた。次の間で、先生が坊さんから禪話を聞いてゐるのを傍聽してゐると、「機を忘ずる」といふ話が出た。それは、自分の心の中に一物有つて、かうしようとかあゝしようとかいふ目論見が先に立つては決して成功することは出來ぬ、これは劍術の上では一ばんの病である、劍は人を斬るもので無い、他に斬られないのが劍術である、即ち擊つものでは無く衛るものである、然るに此方から今度はかうして打たう、あゝして打たうと、打つことばかり心掛けてゐては決して打つことの出來るものでは無いといふやうな意味の話であつた。

生來聰明な海舟翁は此の話を聞いて、成程と感するところあつた。今迄は此方から打たうとばかり考へてゐたが、それが抑も誤りであつた、よし、今度は一つやり方を變へてみようと、前のやうに猿に對して打つてかゝらず、たゞ竹刀を以てあしらつてゐると、此方に隙がある、そこで向ふから打つて來た、其の時初めて猿を打つことが出來たさうで、其の時の嬉しさは堪らなかつたといふことである。つまり最初は此方に隙が無いので却て猿の爲めに嘲弄せられたが、此方が隙を見せた、即ち機を忘ずるに近づいたので、先方から覗つて來た、其の時は猿の方に機が起つて來たので、初めて之を打つことが出來たのである。

子供が初めて左の手に茶碗をもち、

右の手に箸を持つて御飯を戴く、なかなか其の機が六かしい。指一本の置き具合で箸が自由に動かぬ。左の手もよほど上手に持たせないと茶碗を取り落すやうになる。其の茶碗なり箸なりを上手にもつといふことについては、母親も色々と世話を燒き、又子供自身も十分意識を用ゐなければならぬ。けれども其の儘で壯年に至り、更に老年に及んで、箸はどちらで持つか、此の指はこちらへ出てはいかぬ、茶碗はどういふ風に持つかといふやうな風に一々意識を働かしてゐては、到底自由自在に御飯を食ふことが出來ない。然るに有難いことに我々は少くも此の事に關して丈けは何時の間にか機を忘れてしまつて、どちらに箸をもつか茶碗をもつかなどの考慮が要らなくなり、膳に向へば茶碗と箸と食物とが一致して少しの意識も働かさずに自由に御飯を食べることが出來るのである。

是れは我々が歩くことも同樣、字を書くことも同樣であつて、要するに何事でも機を忘ずるやうにならなければ本當のものでは無い。君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友などの間に於ける倫理についても、又各自の携はつてゐる職業についても然うであらう。我々は君に忠義をしなければならぬ義務があるとか、是れは國民の義務だから斯うしなければならぬといふやうに、權利とか義務とかいふ名の付いてゐる間は決して本當のものでは無い。忠君とか、愛國とか、權利とか、義務とか、さういふ一切の機を忘じ去つて、たゞ偏に自己の本分を盡す。そこに初めて靈妙名狀すべからざる自他一致の境に到ることが出來る。太陽が毎日我々を照す。それは權利でも無く、義務でも無い。彼はたゞ彼の本分を盡してゐるのだ。水は物を濕ほす、火は物を燒く、そこに善惡も是非も曲直もなく、たゞ其の本分が自然と現はれてゐるのである。夫婦にしても、夫は妻を愛さねばならぬから愛する、妻は夫に從はねばならぬから從ふといふのでは、本當の夫婦の情は起らぬ。兄弟にしても、朋友にしても同樣で、すべての事が道理を離れ、理窟を離れ、無意識に委せ行くに至つて初めて靈妙名狀すべからざる所に到ることが出來るのである。

各自の職業にしても、義務の觀念が先に立つてゐるうちは本當の勤務といふものゝ出來るもので無い。權利とか義務とかいふ觀念を忘じ去り、かうしなければなるまい、かうしては惡からうなどいふ意識を離れてしまひ、たゞもうぢかに仕事そのものと一枚になつて自分の本分を盡す。さういふ風にならなければ本當の仕事をするといふ譯には行かぬ。

是れはなか〳〵六かしい事であるが、其の六かしい處をどうかして得るといふのが人間の修養の眼目である。佛教などの教へるところも結局はこゝに外ならない。

『八犬傳』略年譜

永享十一年
○二月十日　管領足利持氏、執權上杉憲實の爲に幽閉され、父子共に自殺す

同　十二年
○三月十五日　結城氏朝、持氏の遺孤春王・安王を擁して結城に擧兵す

嘉吉　元年
○四月十六日　結城城陷る○里見義實、父季基の遺訓を奉じて城を逃る○大塚番作村雨の太刀を守つて亡命す
○同　十八日　義實、安房に逃れんとし、三浦の矢取の入江に白龍を見る
○同　十九日　義實、安房城主安西景連に賴らんとして容れられず
○同　二十一日　白鷺河畔に金碗八郎と謀り、神餘の逆臣山下定包討伐の兵を擧ぐ
○五月上旬　義實の兵龍田城を陷れ、定包及び奸婦玉梓を梟首す○義實長狹・平郡兩郡を領す○平館城主麻呂信時滅ぶ
○同　十六日　春王・安王斬られ、大塚匠作難に殉ず○匠作の子番作、幼主及び父の首級を奪ふ
○同　十七日　番作、木曾の夜長麻の荒寺に許嫁の綉手束を救ふ
○七月七日　金碗八郎孝吉自殺す

同　二年
○夏　義實の第一女伏姫生る

同　三年
○冬　義實の嗣子義成生る
○大塚番作、犬塚と改姓し居を大塚に定む

同　四年
○伏姫、役行者より八行の珠數を受く

長祿　元年
○秋　安西景連、豪犬八房の爲に啖殺され安房・朝夷二郡義實の所領に歸す
○義實、安房の國主となり治部少輔に補せらる○管領足利成氏、下總許我に移る○伏姫八房に伴はれ富山に入る

同　二年
○秋　伏姫自害(十七歳)、八つの靈玉散失す○金碗大輔孝德剃髮して、大と號し、八靈玉を尋ねて諸國遍歷に上る

同　三年
○八月　義實遁世し、子義成安房守となる
○九月　犬山道節生る
○十月二十日　犬飼現八生る(幼名玄吉)
○十一月　犬田小文吾生る
○十二月一日　犬川莊助生る

寶正　元年
○七月　犬塚信乃生る
○犬村大角(幼名角太郎)生る
○現八、成氏の臣犬飼見兵衛に引取らる

同　三年
○正月　濱路生る

同　五年
○十月三日　大角の父赤岩一角、庚申山にて怪猫に殺さる

同　六年
○九月十一日　莊助の父犬川則任自殺す
○十一月二十九日　莊助、母の死に會ひ大塚の庄官墓六に雇はれ額藏と呼ばる
○同月　毛野の父粟飯原胤度、欺かれて龍山逸東太に殺さる
○十二月　胤度愛妾調布、相州大坂の里に遁れて毛野を生む

應仁　二年
○九月　義成の五の姫濱路、鷲に攫ばれ甲州の四六城木工作に養はる

文明　二年
○三月　信乃の父番作切腹す

同　七年
○冬　犬江親兵衛生まる(渾名大八)

同　九年
○四月十二日　力二郎・尺八、曳手・單節と婚す
○同　十三日　鰹島・練馬の兩族亡び道節の父道策、定正の臣龜門三寶平に討たる

同　十年
○六月十八日　信乃、許我に赴く(十九歳)
○同　十九日　濱路、圓塚山にて左母二郎

に殺され、左母二郎また道節に刺さる○莊助・道節相爭ひて各靈玉を取交ふ○蟇六・蟇籠、籔上宮六に殺さる○額藏、主の仇を討つ○信乃許我に着く
○六月二十日　額藏・背助縛につく
○同　二十一日　信乃・現八芳流閣上に鬪ふ
○同　二十二日　小文吾の義弟山林房八郎死して信乃を救ふ
○同　二十四日　信乃・現八・小文吾の三犬士大塚に赴く
○七月二日　〃、大、大塚を指して行德を船出す○額藏、庚申塚の刑場に三犬士に救はれ、戸田川にて猎平父子の義により逃る。力二郎・尺八奮戰して死す
○同　五日　蜑崎照文、妙眞・親兵衛を伴つて安房に赴く。途中惡漢蛇九郎に阻止され、親兵衛は神隱しとなる
○同　六日　道節、定正を討ちて成らず
○同　七日　荒芽山に五犬士猎平等邂逅し上杉勢に包圍され、晉音夫妻死守して五犬士を落す
○同月中旬　小文吾、惡漢並四郎を刺し、嫌疑を受けて逆臣馬加大記に抑留せらる

同　十一年
○五月十六日　毛野、對牛樓上に父の仇大記を討ち、小文吾と共に石濱城を脫る

同　十二年
○九月七日　現八、奥羽へ志し途次、野州庚申山にて赤岩一角の靈に遭ふ
○同　八日　現八、角太郎を訪れ、其夜贋一角方に宿る
○同　九日　角太郎の妻雛衣自害す○角太郎贋一角を討つて父の讐を報ず

同　十三年
○二月中旬　角太郎、大角と改名し、現八と共に赤岩を發す
○十月下旬　信乃、甲州石和にて泡雪奈四郎に狙撃され、舊緣四六城木工作の和解を得て暫く此の家に留る
○十一月中旬　奈四郎及び木工作の妻夏引木工作を銃殺して信乃に罪を轉嫁す○石和指月院に在りし道節、信乃を救ふ○信乃、〃、大・照文・道節と邂逅す
○同　二十一日　信乃・道節・照文の三士、義成の五女濱路姫を護つて石和を發足す
○同　二十三日　信乃、途上にて奈四郎の首を刎ね、木工作の仇を報ず

同　十四年
○三月下旬　小文吾、越後小千谷を過ぎて石龜屋次團太方に投宿す
○四月初旬　小文吾、小千谷の闘牛場にて暴牛を鎖む○其夜次團太の乾分磯九郎、道に船蟲に詐蟲に詐り殺さる
○五月十八日　小文吾眼を患ひ、船蟲これを刺さんとして成らず、庚申堂に吊さる
○莊助通り掛つて之を救ふ○船蟲の夫酒顚二、次團太方を襲ひ却て小文吾・莊助に殺さる○船蟲、鎧内と共に逐電す
○同　十九日　莊助・小文吾、籔大刀自の内命により執事稻戸津衞に捕へらる
○六月中旬　二犬士、稻戸津衞の援けを得て籔大刀自を奪き危地を脫す
○毛野、諏訪湖畔にて父の遺品小篠・落葉の兩刀を得。莊助・小文吾に會ふ
○此夏　上總城主蔡田素藤、濱路姫に懸想し里見家に求婚、拒絶されて怨を抱く
○九月下旬　大角・現八の二犬士、千住樋北の豪族氷垣夏行に賊と誤られて監禁され、賢婦重戸に救はる○途上、信乃・道節と邂逅し汚名を雪ぐ
○十月中旬　現八・大角、石和の指月院に歸る○小千谷の石龜屋次團太、姦婦をこぜの讒訴に會ひ、捕へられて永らく嫌疑晴れず

同　十五年
○正月十日　莊助・小文吾、信州より石和へ歸り、四犬士指月院に相會ふ
○同　十五日　〃、大、麻生に奸賊蠶鰕坊を亡ぼす○義成の嫡子義通、鎧着初めに上總諏訪神社に詣で、素藤に生擒らる
○同　二十日　放下師物四郎、湯島の社頭にて扇谷定正の室蠶目前に會ひ、次團太の乾分に代つて次團太釋放の嘉旋を求む
○物四郎、武力を試されて侵臣龍山兎太夫(龍山逸東太)の暗殺を依囑さる○船蟲・鎧内、司馬濱にて惡事を働き六犬士のために牛刑に處せられ亡ぶ
○同　二十一日　毛野、五犬士の助力にて鈴森に兎太夫を擊ち父の仇を報ず○定正兵を率ゐて赴き破れ、五十子城ほ虛を衝

かれ陷つ○壓目前・河經櫛佐、實を負ひ自刄す○義成館山城を攻め持久戰に入る
○二月下旬　義實、富山に伏姫の墓を展ず
○犬江親兵衛、山上にて主の難を救ふ○親兵衛、其夜單身館山城に入つて素藤を擒にし、功により同城主に封ぜらる
○三月中旬　素藤追放され妙椿を賴る○妙椿妖術を以て親兵衛を義成より遠ざく
○同　下旬　妙椿等、一擧館山城を奪還す
○四月初旬　荒川清澄の軍妙椿の幻術により大敗す○妙椿、濱路姫を誘拐せんとして伏姫の神靈に阻止さる○南彌六、素藤を刺さんとして殺さる
○同　十一日　義成、照文に親兵衛召還の使節を命ず
○同　十二日　河鯉孝嗣、靈狐に救はる○親兵衛、孝嗣を里見へ推擧せんとし、偶ゝ素藤の再叛を靈狐に聞き相共に安房に戻らんとす○途次次團太主從の難を救ひ、照文とも邂逅す
○同　十三日　親兵衛、館山城に素藤を擒へ妙椿を戮す
○同　十五日　親兵衛、孝嗣以下を伴うて結城に向ふ○七犬士また穗北を發す
○同　十六日　、大法師等結城戰址に結城戰死者を供養す○逸足寺の僧德用、結城の家臣と計り、大の一行を襲うて敗らる
○同　十七日　犬士等、能化院の廢址に結城の老臣小山朝重を迎接す
○同　下旬　義成、白濱延命寺に里見家の廟墓を改葬し、大を開山とす
○五月初旬　八犬士、、大・照文に伴はれて安房に歸參し義實父子と君臣の誼を結ぶ
○七月中旬　八犬士改姓の勅免を請ふ爲、親兵衛正使、照文副使となり京都に赴く
○同　下旬　一行苛子崎にて海賊を討つ
○同　二十五日　八犬士に金碗宿禰の姓氏を賜ふの宣旨を拜す
○同　二十七日　禁裡及び柳營に貢物を獻上す○親兵衛は管領政元に止められ照文獨り宣旨を奉じて歸國す
○十一月下旬　親兵衛虎を退治歸途に就く
○同　下旬　定正・顯定和し里見征伐を議す
○同二十八日　義成洲崎社頭に軍勢を聚む
○同下旬より十二月二日に渉り驛合諸侯兵を率ゐて五十子に集まる
○十二月八日　水陸兩合戰に里見軍大捷す

文明十六年

○二月初旬　照文正使、大岸澄妙副使として金銀寶物を禁裡及び柳營に獻ず
○同　下旬　里見家、水陸大施餓鬼を行ふ
○三月二十八日　里見の使臣等安房に歸着す○秋篠廣當勅使代、熊谷直親室町殿御使として照文と同行安房へ下る
○四月十六日　義成、洲崎浦に兩御使に謁す○義成正四位上左少將に叙任せらる○定正・顯定の和睦の使者來る
○同　二十一日　兩軍の和議整ひ十二敗將を驛合軍使節に渡し四城を返還す○信乃等、成氏を許我に送り、信乃、村雨丸を献じて亡父の遺志を果す
○六月一日　里見及び兩管領以下相模洋上に會し、京都の兩御使を立會として誓書献酬の義を行ふ
○同　六日早天　京都の兩御使洲崎を發向八犬士・照文等恩命の御答禮奏上の爲め同行上洛す
○七月二十三日　洲崎の浦に歸着

同　十七年

○二月　八犬士に各ゝ義成の八女を賜ふ

長享　二年

○四月十六日　義實卒去す

編輯局より

△待望の『讀本傑作集』が出來上りました。本叢書も第五回配本となり、愈ゝその半ばに達しました。著者先生のお骨折りは勿論、編輯に校正に、精一杯の努力を致して居ります。配本が多少遲れましたが御寛恕願ひます。

△和田博士の『評釋八犬傳』が、博士生前の努力の結晶であることは勿論、樋口先生の『評釋雨月物語』が全くの新研究で、從來の多くの評釋書を嶄然拔く白眉篇であることは讀者諸賢と共に感激に堪へない所であります。

△次回配本は、三田村鳶魚先生の『滑稽本名作集』です。斯界にあつて他の追隨を許さぬ獨自の立場にある先生が、寸分の隙もない解說評釋は、これまた斷然異彩を放つてゐるものです。御期待下さい。

評釋
江戸文學叢書
月報

昭和十年十一月十日印刷
昭和十年十一月五日行發
東京市小石川區竹早町三ノ九
日本書籍株式會社
大日本讀書會
編輯兼發行人　村川新次郎
東京市小石川區竹早町三ノ六
印刷所　常磐印刷所
印刷人　奈良直一

『里見八犬傳』に就ての追懷

市嶋春城

亡友和田萬吉博士の遺業たる、曲亭馬琴の『里見八犬傳』の研究が、本叢書に收められ、今次出版されたにつき、吾等は坐ろに幼年時代に思を馳せ、如何に吾等が當時此の讀本に陶醉せしかを追憶せざるを得ない。

時は明治八年頃、吾等は既に英學を學んでゐた頃であつたのに、書生間に何が流行であつたかと云ふと、『八犬傳』を讀むことであつた。あれは馬琴が二十八年の心血を灑ぎ、失明しても尚ほ屈せず、到頭百六卷の大部を完成したもので、一たび通讀するにも相當の時間を要した。然るに之れを二度三度も讀み直したものが幾人もあつた。坪内逍遙翁の如きは

郷里に於て三度讀んだと曾つて語られたことがある。あの頃此書を精讀するのが書生間の誇りであつて、之れを讀まねば肩身が狹かつた程讀うて讀み、サハリ文句は暗誦されて、同窓の誰れかが暗誦を始めると、吾々も負けて居らず、相和して朗誦したものだ。

今は忘れたが信乃が濱路と暮夜別れる處など『信乃は臥房に入りしかど』から初まつて、約一頁程の名文句は誰れも彼れも諳じてゐたものである。信乃現八芳流閣上の格鬪、犬坂毛野の對牛樓上復讐の所などは、幾回讀んでも飽くことを知らなかつたもので、當時の書生は皆之れに陶醉した。

私が早稲田の圖書館長時代に、圖らずも饗庭篁村翁から其所藏の馬琴の遺書を讓り受けたが、其中に馬琴が失明後亡長男の未亡人に口授して書かせた草稿もあり、これなどは涙なくしては讀めぬ逸品で、曾つて圖書館に此等の遺書を陳列して公衆に見せた時、第一番に來觀したのは其當時の盲啞學校校長小西信八氏であつた。自分は流石に盲人に同情ある小西氏の來觀を喜んだが、その緣因で、自分は同校に臨み盲人に對して馬琴に關する一場の講演を試み、特に失明後の馬琴の苦心を語つたことがある。此時驚いたのは、或る失明の法學士が傍聽席にゐたが、其細君が良人を慰めんと、『八犬傳』全部を點字で作ることを企て、既に八分通り出來たと聞いたことであつた。現に或る部分を盲人が點字で四五枚讀んで聞かしてくれたのには恐れ入つた。

一部百六卷と云ふ小説は實に空前の大作であつて、それが一般に大歡迎を受けたことは、宛から頼山陽の『日本外史』が冷熱なく讀まれてゐると同樣であるが、私は嘗つて馬琴が人に寫させて所藏した外史の寫本を見たことがある。其の卷末に馬琴が漢文で十數行の識語を書いてゐた。其の文章は忘れたが、其意味は覺えてゐる。流石傲岸の馬琴も山陽をあしざまに評することなく、寧ろ稱揚して、俺れも山陽と同じこと

（次頁下段へ）

腦中に馬琴秋成の影を追ふ

文學博士　五十嵐力

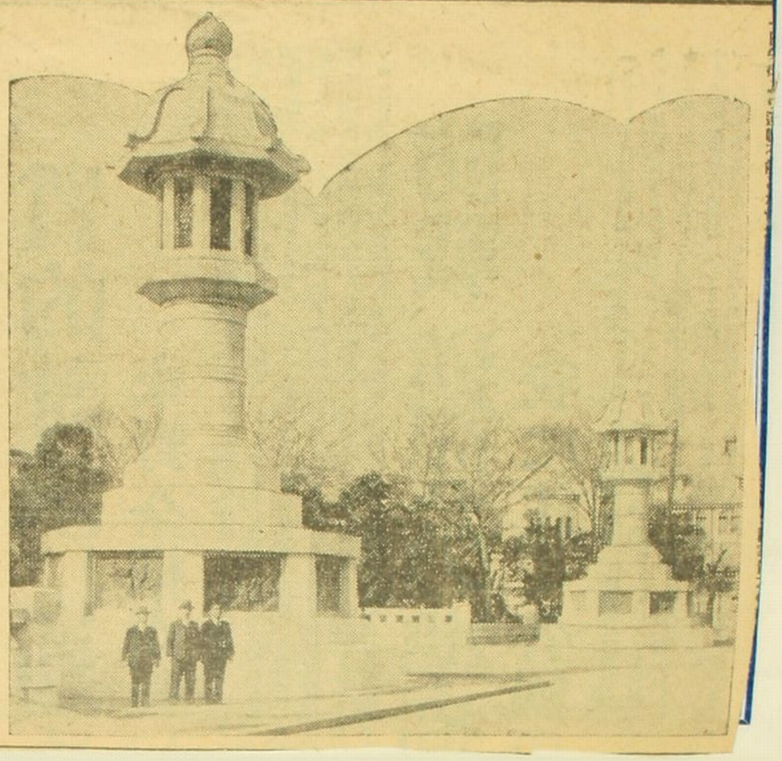
一

中學時代に私は馬琴の崇拜者であつた。近所の藏書家が貸してくれるまゝに、順序も方針もなく讀み散らしたのであつたが、『俊寛僧都』、『夢想兵衛』、『南柯夢』、『巡島記』、『弓張月』と讀み來つて、『八犬傳』に進んだ時に、私はもう馬琴に對する崇拜敬美の絶頂に達してゐるのを覺えた。私は日本に於いてのみならず、全世界に馬琴ほどの大作家はゐないと考へた。そして『濱路(はまぢ)くどき』、『雛衣(ひなぎぬ)くどき』、『芳流閣の格鬪』と、名高いところ〳〵を諳誦し、七五調の美しい文句などを、頻りに寫し集めては悦んでゐたのであつた。私は明治二十五年、十九歳の年の九月に、始めて早稲田の文學科に入つたが、坪内先生がシエークスピヤの講義の間々に、馬琴を引合に出しては、よく非難されるのを聞いて、心ひそかに憤慨し、いつか辯駁の大論文を書いて、馬琴を世界一の大文豪に祭り上げようと考へたのであつた。

私の馬琴熱はそれから間もなく醒めてしまつたが、しかしながら馬琴に一種の偉大を認める點に於いては、今も昔と變りがない。今は時代が變つて『八犬傳』一部を讀み上げるのを馬鹿々々しいと思ふ文學青年諸子も多いであらうが、二昔三昔以前には、私と同じく、彼れを無上位の文豪と思ひ込んだ人も多かつたであらう。また時代として見れば、文化文政期は、その時代精神の最大表現を彼れの讀本(よみもの)に見出だした時代で、同時に彼れに文壇の第一座をさゝげた時代である。凡そ、如何なる一個人によつてなりとも、第二位を許さるゝのは、とにかく偉いところのある人であらう。況んや多數の人から第一位を許され、一つの時代に第一位を許される人は、必然に何等かの偉大なる點を持つてゐるに相違ない。そも〳〵文化文政期に覇を唱へた文學は讀本であつた。更に限つていへば勸善懲惡主義の小說であつた。而して其の勸善懲惡小說家の第一人者は曲亭馬琴であり、馬琴の數多き斯種の小說中の最も偉大なるものは『南總里見八犬傳』である。然らば吾々が馬琴通にして讀本の研究家たる故和田博士の親切周到なる解說、をやつてゐるのだ、唯だ異なるのは、彼れは漢文で書き、俺れは和げて書く丈の事だと言うてゐたが、馬琴の抱負も之れで窺ふことが出來る。實は小說とは言へ、幕末頽廢の士氣を鼓舞し、道義觀念を作興するに力があつたことは、『日本外史』が世道人心を引立てたのと兄たり難く弟たり難き趣がある。

和田博士は馬琴に忠實な人で、前には雜讀の日記を出版されたことがあり、『評釋八犬傳』に就ては特に長い間精神を凝して、著者の傳は勿論、各輯の梗概、八犬士性格の解剖、著者立案の態度などを充分研究し、各輯の美文は漏さず收錄して、巻頭に細註が附してある。如此は和田博士の如き堪能の人で始めて成し得ることで、吾等は博士に敬意を捧げざるを得ない。唯だ憾むらくは博士が斯く心血を灑いだ此業は成りながら、其出版を見るに至らず、近かれたことは、返す〳〵も殘念な事であるが、博士の氣根强き研究は原著と共に長へに學界を益するであらう。(終)

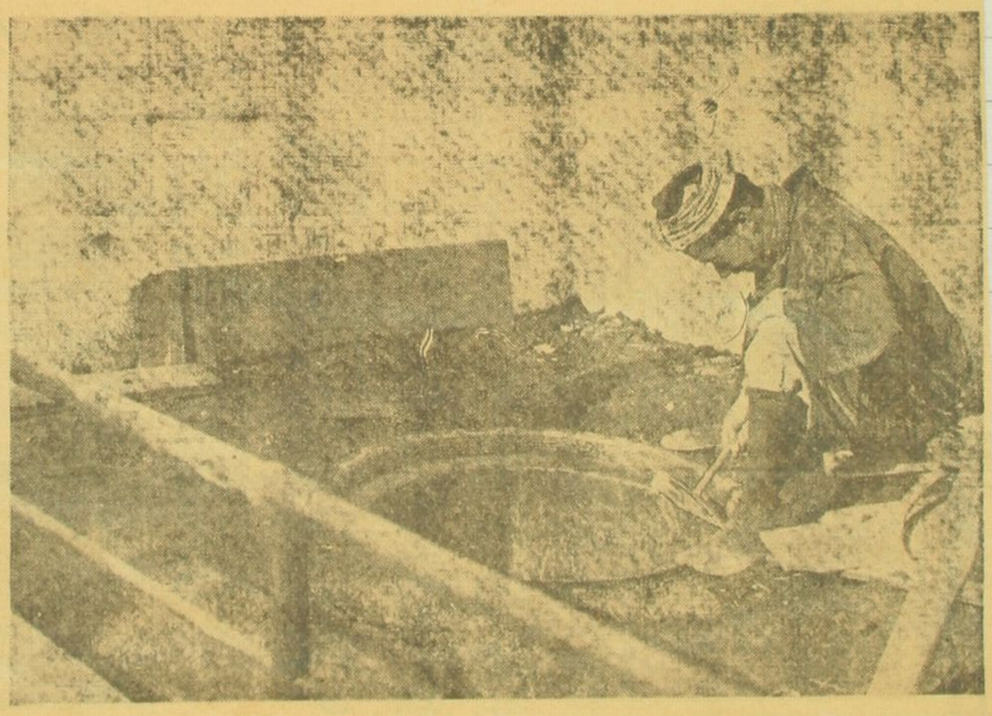
世界一の大燈籠完成



【東京電話】國の英靈贈る九段靖國神社境内に世界一を誇る大燈籠が滿三ケ年の工費を費し漸くこの程完成、來る二十七日盛大なる獻納式並びに祭典が擧行される運びとなつた

この大燈籠は富國徴兵保險が昭和八年四月記念の一つとして國の英靈を慰め神恩の念を高めるため獻納されたもので、工學博士伊東忠太氏の設計になり瀬戸内海産の御影石の八角に塡込まれ鋼鉄には帝室技藝員香取秀真氏作鹿草模様に金色の御紋章が燦然と輝いてゐる、いよ〳〵明春元日からこれに點火されるといふから一般參拜者をして優雅崇敬の念を與へ下に水、魚、鳥、獸、吉田、和田の諸人家の力になる海軍記念碑に一段と美觀を呈するであらう【寫眞は完成せる大燈籠】

公園となる吉良上野介邸



本所松坂町の吉良上野介の邸跡が此度國土計入りの史蹟公園として來る十四日から開園される事となつた寫眞は上野介の首洗ひの井戸

署名（サイン）狂のNO・1（ナンバワン）

署名蒐集家はずゐ分多いが、縁玉になると流石にスケールが大きい。

ユーゴースラヴィアの住人ミロード・ライチエヴイツチは、世界を股にかけて、大頭株ばかり、十三皇帝、十大統領、その他のお歴々三萬名士のサインを集めて來た。ベルグラードのブリンスポール博物館の委囑によつて働いた仕事だが、二十五年の歳月を費し、一〇、〇〇〇ポンドの金を費ひ果した。

この大事業が完成した今日、ライチエヴイツチの所謂「サイン狂のオデツセイ」を聞くと却却面白いことだらけ。

アルバニアのゾツグ王に、サイン帖を手にされると、くり返し、ヒンデンブルグ元帥の署名を御願ひあそばされて、

「これは何で書いたらう」

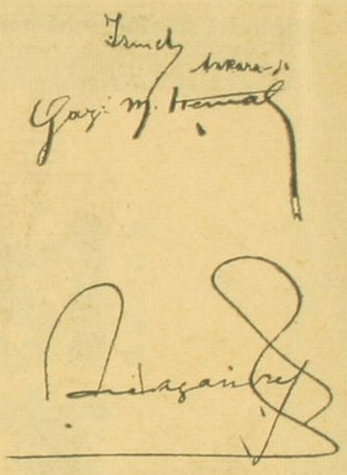
と、訊ねられた。

「鵝ペンでございます、陛下」

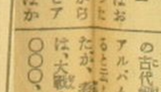
と、無答へ申上げた「書過のペンではこれ程太く書けませんでございます」

「よし」

と、ゾツグ王が頷かれた「鵝ペンで書くことにしよう」



ケマルパシヤ（上）とアレキサンダー皇帝の署名（下）



ンヒ——デンが、それから以後セルビアの外交官はかは、容易に得難いものであるが、その代りに一度得た以上は、それから先は非常に樂なことになる。

私の仕事にしても、若し最初に、セルビアのピータア皇帝（ユーゴースラビアのアレキサンダー皇帝の御父君）の御援助を賜はらなかつたら、これ程容易に成就しなかつたらうと思ふ。

×

ピータア皇帝は歐洲でも有名な平民的な方であつた。毎朝、侍從を一人お供に、ベルグラードの町を散歩されて、市民にお言葉を賜はることさへあつた。私がこの仕事にとりかゝると間もなく、拜謁を賜はつて、

「お前は乞食みたいだな」

と、御冗談を仰せられた。

「陛下、飛んでもないお話でございます、私はセルビアの代表のつもりで世界を歩いてをります」

と、お答へ申上げた。

「さうか」

と、陛下はお笑ひになつたが、それから以後セルビアの外交官はかつたのだらう。

もつとも世界中の人間が皆馬鹿になつたやうな大戰爭のまつ只中でも、サインのことだけは私は忘れなかつた。

「アフリカのサインは煙草にせよ」である。

葉巻をふせると、すぐ署名をして呉れる。受取みたいなものである。

×

印度も煙草である。

私は王様たちの西洋風宮殿に感つも參殿して、親戰を積むに從ひ、王様たちのやることが似たり寄つたりであることに氣がついたが、入つて見て、黄金造りの道具造作に魂消ることは、いつまでたつても變らなかつた。

マイソールのマハラヂヤにも惜いたが、ハイダラバツドのニザムなどは、正に世界第一の金持であらう。

署名をして呉れた上に黄金造りの古代劍と、金箔の盃と、初手のアルバムを、どうしても私に呉れるといふのである。無論戴いつたが、考へて見れば——ニザムは、大戰中に、英國政府に、一五、〇〇〇、〇〇〇ポンドを大して惜

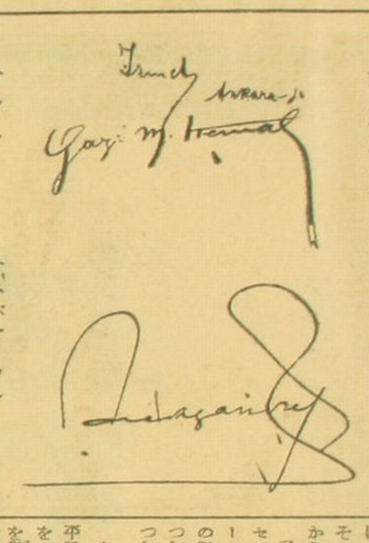
酒好（きけのみ）の夫（おつと）を持（も）てば

奥さんの氣苦勞は大變

笑ひ上戸に戸……おん
忘年會や
交際で遅い歸りの
千鳥足、鼻唄まじ
りのご機嫌も、墨
くればつらい二日
酔、頭痛鉢
巻唐辛子

泣き上戸、怒り上戸、くだ巻き上戸、操ぎ上
なじ酒を飲みながら酔つての癖は十人十色、

署名狂のNo・1



ケマルパシヤ（上）とアレキサンダー皇帝の署名（下）

署名蒐集家にする分多いが、紙玉になると流石にスケールが大きい。

ユーゴースラヴィアの住人ミロード・ライチュヴイツチは、世界を股にかけて、大頭株ばかり、十三皇帝、十六王侯、その他のお歴々三萬名士のサインを集めて來た。ベルグレードのブリンスポール博物館の委囑によつて働いた仕事だが、二十五年の歳月を費し、一〇、〇〇〇ポンドの金を費ひ果した。

この大事業が完成した今日、ライチュヴイツチの所謂「サイン狂のオデツセイ」を聞くと却却面白いことがある。以下私といふのはライ氏のことである。

×……

ムソリニに會ふのは容易なことではない。大使から頼んで貰つても却々難しいといふ話であつたが、四週間ネバツて面會に漕ぎつけた。

ムソリニの部屋は三百畳敷位の大きなもので、その向ふの方におん大の机がある。

青い絨毯の大草原を踏みしめてそこまで行くのが、一つの心理試驗みたいなものだ。「問題」の代りにサイン帖を握つて歩いて行くと、ムソリニがコワイ顔をして出て來た。

「どういふ用か」

と、ブツ〳〵切れたやうな佛語で訊ねたので、用件をきり出すと、

「署名帖だが、いやだ、さよなら」

はるばるローマまで來て、取りつく島がないとはこのことである。しかも一たん定めた決心は變へないといふ相手である。

ムソリニ祭の一週、暴來ないイタリー語でかういつて見た。

「でも閣下我々ファシストのためにお願ひいたします」

ムソリニはニツコリ笑つて書いて與へられた。そこで大急ぎで逃げ出したのである。「君は……」と訊かれないうちに。

これはまだ楽な方で——

×

ムスタフ・ケマルパシヤは、暗殺を恐れて首都アンカラから十四マイル離れた離宮に隠れて、トルコを支配してゐる。

だから、大使だの外交官だの役人だの、毎日行列作つて逃ふ的來て、知々近寄れない。

アンカラに滞在してゐるうちに漸く高官と知己になつて、歓迎會の切符を貰ひ受けた。

切符の檢査は厳重を極め、ケマルパシヤの居る壁まで十二回改められた。

ケマルパシヤは、サイン帖を手にして、

「何年位この間題で歩いて居るか」

と訊ねた。

「もう十五年になりますが、まだあと十年歩くつもりです」

と、答へた時には、多分彼が笑ふだらうと思つたが、ニコリともしないで厳粛な態ひで署名した。私の高年齢はこはれてしまつた。

×

アルバニアのゾググ王に、サイン帖を手にされると、くり返し、ヒンデンブルグ元帥の署名を御覧あそばされて、

「これは何で書いたらう」

と、訊ねられた。

「鷲ペンでございます、陛下」

と、御答へ申上げた「普通のペンでこれ程太く書けませんでございます」

「よし」

と、ゾググ王が渡された「鷲ペンで書くことにしよう」

鷲ペンは直ぐにあり合せなかつた。

ゾググ王は、私の差し出した高年齢を放り出して仰せられた。

「普のものに見せたいから、これを一寸置いて行け」

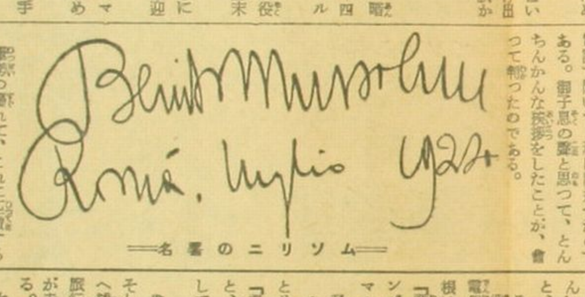
後にも先きにもサイン帖が私の手許を離れたのは、この時だけである。後で聞くところによると、ローマから特製の鷲ペンを空輸してお手許に届けさせたのださうである。

それだけに眼はつた御署名は謹厳な御威勢であつたが——

×

そのお手本ともなつたヒンデンブルグ元帥の署名は、實際素晴らしいものである。三萬の署名中正にピカ一である。齢八十の元帥は、短い指に鷲ペンを握つて宛も軍を指揮するやうな態度で、三度名をした。

老元帥が杖に縋つて、部屋に入つて來た時、蹴を聞いて私は驚いた。三十位の若々しい力のある蹴であつた。その蹴を、行く前に、電話で聞いて、私は間違へたのである。御子息の蹴と思つて、とんちんかんな挨拶をしたことが、會つて解つたのである。



——ムソリニの署名——

蹴勢の優れて、これに匹敵するのは、ルーマニアのマリイ女王の御署名である。

×

カロル陛下の御署名に感銘した事があつた。陛下は、私のサイン行脚に非常な興味を抱かれて、特に個人的な感銘の辭を與へたのである。ルーマニアの皇帝に次ぎに御署名を賜はることが出來た。

高貴の方々の御信頼といふものは、容易に得難いものであるが、その代りに一度得た以上は、それから先は非常に楽なことになる。

私の仕事にしても、若し最初に、セルビアのピータア皇帝（ユーゴースラビアのピータア皇帝（ユーゴースラビアのアレキサンダー皇帝の御父君）の御援助を賜はらなかつたら、これ程容易に成就しなかつたらうと思ふ。

×

ピータア皇帝は欧洲でも有名な平民的な方であつた。毎朝、侍従を一人お供に、ベルグレードの町を散歩されて、市民にお言葉を賜はることさへあつた。私がこの仕事にとりかゝると間もなく、拝謁を賜はつて、

「お前は名案みたいだな」

と、御冗談を仰せられた。

「陛下、飛んでもないお話でございます、私はセルビアの代表のつもりで世界を歩いてをります」

と、お答へ申し上げた。

「さうか」

と、陛下はお笑ひになつたが、それから以後セルビアの外交官はかげになり日向になつて、私の仕事を助けて呉れるやうになつたのである。

陛下のこの御關心は、アレキサンダー皇帝にも引繼がれて、私の仕事の上に絶えず、御援助を賜はつてゐた。その皇帝の御身の上に不慮の御事あらうとは思ひも及ばなかつたが。——

×

ホワイト・ハウスにルーズヴエルト大統領を訪問すると、

「署名はするが、商業に利用はせんだらうな」

と、念を押された。こんなことを聞くのも始めてだつたが、考へて見れば、廣告宣傳の國アメリカである。

「國際の廣告などには惑しません」

と、答へて、署名を得た。

その時である。

使人が入つて來て、一通の至急電報を大統領に渡した。見て、顔色は變つた。

「悪い報せである。君、アレキサンダー皇帝が御急逝遊ばされた、マルセイユで」

私は言葉も出なくなつた。

ルーズヴエルト大統領はソーッとサイン帖を返して、

「君の心中お察しする」

と、私の手を握つた。今、思ひ出しても暗然となる。

×

少し變つた方面の話をしよう。

それは、カイロからケープタウンへ抜けたアフリカ行脚と、インド旅行である。そこでは、王侯たちが未だにお伽噺のやうに暮してゐる。

大戦後の大不況も、その波が及んでゐないところである。

私は大戦最中には、十五ケ國語が出來るといふので、ジブラルタルの郵便局長に任命された。報告する國際間の通信を檢査する役目である。生命の危險はなかつたが、かなり緊張的な仕事であつた。この戦時の緊張に疲れて、當時まだ自動車道路も何もないアフリカへ、署名行脚に出る事になつたのだらう。

もつとも世界中の人間が猫馬鹿になつたやうな大戦爭のまつ只中でも、サインのことだけは私は忘れなかつた。

「アフリカのサインは煙草にせよ」である。

煙草をみせると、すぐ署名をして呉れる。受取みたいなものである。

×

印度も煙草である。

私は王侯たちの西洋風宮殿に驚つも參殿して、驚嘆を禁じに堪ひ、王侯たちのやることが似たり寄つたりであることに氣がついたが、入つて見て、黄金造りの道具造作に驚消することは、いつまでたつても驚らなかつた。

マイソールのマハラヂヤにも伺いたが、ハイダラバッドのニザムなどは、正に世界第一の金持であらう。

署名をして呉れた上に黄金造りの古代劍と、金貨の袋と、切手のアルバムを、どうしても私に呉れると云ふのである。氣味惡く思つたが、蔭へて見れば——ニザムは、大戦中に、英國政府に、一五、〇〇〇、〇〇〇ポンドを大して惜しさうにもなく提供したことがある——私も貰つたのである。

さて、インドはガンヂイである。

×

誰しも旅行者はガンヂイに會ひたがる。私は會つた上にサインをして貰ふつもりであつたが、相手はへうたん鯰である。しかも、狐火のやうに印度中を出没してゐる男であるから、とても駄目かと思つた。

それを摑べることが出來たが、摑べないのと同じやうなことになつた。

「誰か他の人を」

といつて筆を取らないのである。多分印度の王侯のサインが氣に入らなかつたのであらう。

私は、蹴勢を逆べ立てゝ、これでサインが得られなければ、自殺するといつた。

ガンヂイは笑の無い口で笑つて

「シ、死なないでも、いゝよ」

と、サインして呉れた。私には讃めない印度語で——

×

安々といつたのはタゴールで、

「世界中を歩いて、面白い生活でせう」

と、ひげをしごいた。

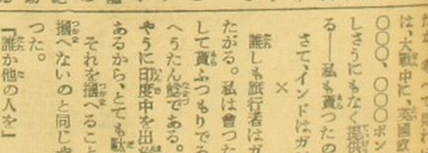
タゴールを見て、私は、幾年か前に、ヤスヤナポリアナで會つたトルストイを思ひ出した。顔色はまるでそつくりだ。そんな所へ行くと殺されるからと注意した。

しかし私自身は殺されもせず、六ケ月の後日本にゐて、この大思想家の死を聞いた。

×

どうしても取れなかつたのは法王ピイアス十一世の署名と、それから、ヒトラーの署名だが、ヒトラーとはごく懇意で、いつでも取れる。私と彼とはベンキ屋として一しよに働いてゐたので、我我はよく話したものである。彼はいつも政治のことばかり話し、私は旅行のことばかり話してゐた。

その時分からヒトラーの方がよくしやべつたものだが、いはゞ甲乙なく成功したわけである。



——ヒンデンブルグ元帥の署名——

【小生記者】

第一回三井寺辨慶力餅

第二回祇園の宿